

明治四十四年六月三十日印刷
明治四十四年七月十日發行

定價金五拾錢

著者

尾立維孝

發行者

三浦魯一

神奈川県川崎横濱製糖會社内住

印刷者

小川邦孝

東京市京橋區瀧山町七番地

印刷所

東京製本合資會社

東京市京橋區瀧山町七番地



溫故勵新生存競爭
 古今矣鈞而掬一郡
 趣味津津猶觀盆池

題宇佐郡地頭傳記後

龍田榎田魯一



好基黒田長政の臣栗山大膳に仕へ筑前に移る既にして致仕歸村す好村の子孫
小野川内村莊屋となり連綿たり

因に副殿物語に副但馬守滅亡の時其室某氏ハヶ岩に來りて隱栖し身を終ると云へり此地鹿嵐
山の麓にて岩石聳立し要害の地なり

野通信承久の役に官軍に屬して伊豫守護を失ふ其子正行逃れて宇佐郡鹿嵐山の麓日岳村に來り山野を開拓して居る遂に此地の地頭職となる永祿天正の際河野傳兵衛と云ふ者あり大友氏に仕ふ其子日岳村莊屋となり連綿たり(月股氏條參照)

小野氏

菅原姓

天慶中小野好古藤原純友追討の爲めに豊前に下向す其功に依り甲斐國を賜ふ其十八世孫小野監物承久の役に官軍に應じたるか故に一族三十六人筑前豊後に配せらる監物八世孫彈正亮好村天文中宇佐郡高並谷田中屋敷に來り住し其地を領して大友義鎮に屬す永祿四年馬ヶ嶽の役に從ひ功あり慶長元年好村其弟八郎好輝及び嫡子小二郎好宗次子源二郎好正三子長左衛門好基を率ひて高並谷の奥八ヶ岩に移住し後來其地を小野川内村と稱す同所に左の墓碑あり

小野入道覺信居士

小野彈正菅原好村

慶長三年二月十八日

法名小野道信

小野八郎菅原好輝

慶長四年〇月七日

追加

總敍に小坂村川面氏日岳村河野氏小野川内村小野氏の事は他日を待ちて竊
查せんと記せしか本篇脱稿の後に至り左の事實を獲たり因て茲に追加す此

三家は地頭二十九家と同列なり

川^{カハ}面^{ツラ}氏

藤原姓

俵藤太秀郷の裔宇佐郡野麻郷小坂村に居り川^{カハ}面^{ツラ}氏と

稱し或は小坂氏と稱す地を領して地頭職となる天文中川顔治兵衛尉重家と云
ふ者あり高家郷中島城主中島大藏丞房直の被官となり永祿九年三月房直に屬
して麻生の役に従ふ天正十七年三月一日中島城に於て黒田長政の兵と戰ふて
死す其子孫小坂村莊屋となり川顔を川面に改む地頭屋敷と云ふか今も存れり
子孫連綿たり

因に重家玄孫某女拜田親實玄孫生山七郎右衛門宗徳の室となる宗徳は寛永二十年に生れ享保
九年五月一日死す(生山氏系圖)

河野氏

越智姓

文武天皇の時に伊豫國越智郡大領越智宿禰玉興と云

ふ者あり其弟玉澄風早郡河野と云ふ地に住みて河野氏を稱す其二十二世孫河

敵以一社同心之儀令放社之條至氏盛子孫者不可有許容之由對社家中同日被成奉書之上者旁以不及沙汰之由所被仰出也者任享祿三年御下知之旨件長職云免田悉可被任公正意之由依仰執達如件

天文六年十二月二十四日

越中守

康

正花押

若狹守

公

時花押

三河守

維

之花押

前大宮司安心院殿（上高村辛島長米藏）

越中守等は大内家臣歟

次郎後縫殿助と稱す寛永中氏吉と云ふ者あり土器長職に補す其子孫高牟禮氏と稱し連綿たり

り家督を進止す其子孫今仁村大西に住し連綿たり

高村氏

藤原性

其家世々宇佐八幡宮土器長職たり高家葛原兩郷の内

高村に居る因て氏とす仁平中氏次嘉祿中氏安文永中廣氏永仁中用氏嘉暦中明氏等を経て文明中大炊允氏盛に至て大内氏臣妙見嶽城代杉伯耆守重祐の被官となる永正十八年四月二十八日其子信氏嗣く

宇佐宮土器長職高村惣名田畑屋敷并一村内檢斷等事先證明明白也然者御代々云御判云筋目任當知行之旨氏盛嫡子信氏令相續上任先規社例每事被致其沙汰社役等不可有相違之狀如件

永正十八年卯月二十八日

伯耆守 花押

高村土器長殿 (下高村高牟禮氏宗藏)

天文中其子次郎嗣く

宇佐宮土器長職事到津公治與安心院公正與相論之次弟被經衆評去享祿三年十二月二十四日被付沙汰於公正之處同四年高村次郎高村大炊允氏盛代依訴申之先被押置中途畢然處今度大炊允氏盛杉伯耆守被官雖令愁訴爲社家身爲武家被官之條被及披露候由被仰出候處爲次郎氏盛名代致言上之由雖申之已氏盛事依爲神

今仁五郎殿 (同上)

因て藤右衛門尉と稱す二十年六月義隆掃部助縫殿允に御許山領今仁名内大西壹町を賜ふ九月義隆亡ふ乃ち一族悉く大友義鎮に屬す弘治三年六月藤右衛門尉其命を承け下毛郡山田安藝守を攻めて其居城を拔く

就今度山田成敗以粉骨分捕忠儀感入候必別而可賀之候先以任和泉守候恐々謹言

八月二十日

義 鎮 花押

今仁藤右衛門尉殿 (同上)

掃部助永祿中山城守に任す

山城守所望之由承候得其意候追而可請上意候恐々謹言

三月九日

紹 忍 花押

今仁掃部助殿 (同上)

紹忍は大友家臣豊前探題妙見嶽城主近江守なり

賢直男子なし天正八年七月二十八日山下保田所職四名並下作散在田畑居屋敷山野等を舉て息女蓬來に讓與す翌年賢直死す蓬來婿忍可探題紹忍の證判に依

候。妙鑑僧之事。大藏丞實子之儀候條。親族近親跡目相拘候者。不可有餘儀。不然候者。任妙鑑之志。忠秀之子共之内一人。家職可被讓與事。肝要候自然別人契約候者。可改替。依而一筆如件。

文明十五年己卯三月七日

忠

秀

花押

今仁用藏

明應中二郎四郎享祿中伊豆守尙賢と云ふ者あり其弟を藤右衛門賢直と稱す並に大内の家人となり天文元年妙見岳城を守り大友勢を拒く

尙賢事妙見岳令在城可遂馳走之由對右田下野守興實申狀遂披露被成御心得候。每事任興實裁判可被遂其節之旨候。恐々謹言。

卯月十九日

隆

仲

花押

重

矩

花押

今仁藤右衛門殿 (今仁保藏)

隆仲は大内家臣貫下總守重矩は同伯耆守なり

賢直後掃部助と稱し其弟を縫殿允と稱す尙賢の子を五郎と云ふ

右衛門尉所望事可令舉敷之狀如件。

天文十二年五月二十九日

花

押大内義隆

者あり是れ蓋し五郎ならん大友氏に屬し門司城を攻む其終焉詳ならず

准地頭三家宇佐宮彌勒寺下司職又は田所職又は土器長たりし者

江熊氏 宇佐姓 封戸郷江熊村に居る因て氏とす初め宇佐八幡宮公文

所下司職たりしか後大友家人となる天正中彈正介と云ふ者あり

田原親貫不儀事早速注進神妙之至候尙其邊油斷有間敷恐々謹言

正月十一日

義 統 花押

江熊彈正介殿 (四日市渡邊三省藏)

此書天正八年なり

彈正介後伊豆守に任す城を築きて居る十五年三好秀次に從ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り城地を致す

今仁氏 藤原姓 元應中今仁五郎と云ふ者あり宇佐彌勒寺領高家郷山

下保下司職たり貞和中能憲觀應中經賴を経數傳して忠秀に至る文明中忠秀山下保下司職及び田所職を帶ふ

依爲大藏丞病死跡目下地職大西名事斷絶之間以惣領進止之儀雖令忠秀知行

彌富孫十郎

三月十九日

依 重 花押

杉因幡守殿

右書中に子にて候五郎とあるを見れば其子を五郎と云ふ事明けし

上津布佐莊瀧貞名山野傍示事從往古當知行之處矢富五郎方捧先證被極上

裁之間被任懇望訖依之瀧貞失本訴及佗讓之條彼名濟錢内壹貫文事限永代御扶持之由被仰出候也

仍執達如件

大永元十月二十二日

道 述

道 信各花押

道 春

別府左衛門尉殿（瀧貞莊一藏）

此書に矢富とあるは彌富なるべし彌富は尾張國中島郡の地名なり其先蓋し此地より出て大内氏の臣となり大内氏本州の守護たるに因り孫十郎に至り宇佐郡津布佐莊瀧貞名の山野を領したるか如し天文弘治の際彌富右衛門尉と云ふ

に登城仕同至九月遂其節候

一同大永依佐東御弓箭參陣可仕之由被仰出二月に罷立神代但馬守一所相勤

於大塚要害攻口下人被矢疵大塚御要害神代但馬守一所遂在城同六月已斐御城番之儀被仰出遂在城越年同三年迄在城同六月藝州就御弓箭參陣仕杉

奎助一所に在陣同八月至石州參陣仕同十二月寺道地に於奎助一所に相籠越年普請等馳走之同二月惣陣並開陳仕

一同大永至藝州七尾杉兵庫助一所に在陣同七月櫻尾於攻口下人三人被矢疵候次第杉兵庫被申渡之同次之年藤懸城誘馳走之

一同大永至西條杉伯州一所相動米山要害於攻口日夜馳走之彼要害御手に入杉因幡守一所遂在城兩年普請以下馳走之

一同大永到熊野御陣替以來於所々馳走之

同十二月二船越御動之時爲鳥子手宛於日村山下人被矢疵同八月於鳥子攻口馳走之段弘因御存知之彼要害御手に入御城誘普請以下馳走之同四月到屋賀在陣仕度々御動馳走之其後府中江在陣中被御要害普請以下馳走之此等之趣可然様可預御注進候恐惶謹言

年赤星隈部と領地を争ひ合戦して敗北す因て外舅鹿子木寂心を便りて熊本城に移る其子城十郎宇佐郡乙女村の内に來りて住居し其地を城村と名く其子を出雲守重家と曰ふ其族城縫殿允と云ふ者子息三人あり天文中吉村内藏丞を殺害して出奔す重家嫡子城助右衛門尉次男城太郎左衛門尉永祿九年大友氏麻生の役を助く太郎左衛門尉天正中黒田氏に屬し田河郡金岡城を守る助右衛門尉庄屋となり後に細川氏に仕へ肥後に移住す太郎左衛門尉嫡子太郎兵衛種信正保二年十月乙女八幡社華表を獻す又祖先傳來の太刀を宇佐宮へ奉納す後入道して一夢と號す延寶七年末二月九日死す乙女村妙見山有近寺に葬る其子孫及ひ太郎左衛門尉弟利兵衛の子孫連綿たり

榮田氏

姓不知

麻生郷上之山城主榮田伊賀守天文中亡ふ蓋し麻生氏の滅する所となりたるもの歟

彌富氏

姓不知

大永中彌富孫十郎依重と云ふ者あり

一見候花押 大内義興

注進軍忠狀之事 (山下村今仁保藏)

一大永元巳斐維孝曰巳斐は、御城番之儀爲百日替被仰出子にて候五郎六月

五月二十日

利行掃部助

親 承 花押

陀摩佐渡守

○ 道 花押

上田式部左衛門尉殿

岩男備前守殿

奥の洲左馬助殿

元永對馬守殿

津留壹岐入道殿 (廣崎衛盛藏)

・ 因に元永は其名を公時と云ふ字佐姓なり岩男は中原の住人にして津留は高森の都留なり

永祿九年蘆荊越前守實蕃大友氏麻生の役を助く後入道して越前入道と稱し其族蘆荊掃部助同善次郎其子玄允種實と共に田原紹忍の家臣となる天正十年四月二十三、四日種實紹忍に與力し時枝城を攻めて負傷す其子孫連綿たり

城氏

平 姓

鎮守府將軍平維茂嫡子出羽國秋田城介繁茂七世孫越後守

城資盛平氏滅亡の際肥後國に下りて住す其子城三郎其子城親冬其子城能隆に至り菊池氏に屬して山鹿郡に居り其地を城村と云ふ其後孫越前守親賢永正六

二年甲戌正月十五日死す法名前越州大守心叟良圓居士其弟佐渡守具直十一年十月廣山八幡社領沒收の事より妙見探題田原紹忍と矛盾し十一日神社及び城郭悉く紹忍の燒毀する所となる寛永三年丙寅四月十一日死す法名前佐州大守心叟長圓禪定門是より前其子大藏丞宏直家を繼ぐ其弟兵衛四郎直孝宇佐宮武官となり寛永六年己巳十月十日死す法名心叟久圓居士其子を直正と曰ふ子孫連綿として弘山氏と稱す宏直の子半太夫正直關ヶ原の役黒田長政に従ひ軍功あり慶長五年長政封を筑前に徙すに追ひて隨ひて移り千石を賜ひ莊氏と稱す長政野の一字を加へ賜ひ遂に莊野氏と改む宏直筑前に於て元和四年戊午六月二十九日死す同國金龍寺に葬る法名快巖良慶居士今の天津村莊野氏は蓋し宏直の後ならむ

蘆荊氏

源 姓

常陸守源義光の裔幸島郷沖の洲村に居る蓋し此地蘆荊叢生の海洲なり之を荊取の義に因りて蘆荊氏と名くるなり其地名に因りて沖の洲或は奥の洲氏と曰ふ天文中奥の洲左馬助と云ふ者あり

就廣崎下作職之儀河内守參上入組遂披露候處双方御被官之儀候之條給主可爲分別次第之通被仰出候間各可被添心事干要候爲存知候恐々謹言

八幡宇佐宮大宮司職巡役事

御判御奉書如此然任被仰出之旨可被沙汰渡到津公弘之由候也
仍執達如件

享德二年十二月十五日

伯者守花押

莊若狹入道殿（到津男爵藏）

永正中廣山加賀守正直と云ふ者あり廣山八幡宮別當彌勒寺を創造し弟雙富隣
公元禪師をして住持せしむ廣山莊四方指左の如し

廣山莊之由來

廣山莊は東西南北四方指之正中以莊稱莊村廣山莊御正門奉備八幡宮垂跡也

莊廣山加賀守 田部正直

天文十三歲甲辰四月八日

南之界は横山之莊

北之界は海邊

西之界は中尾之莊

東之界は平田之莊

正直天文二十三年甲寅十一月二十日死す法名前加州大守賀叟長慶居士覺靈其
子を忠兵衛重直と曰ふ越後守に任す永祿九年三月大友氏麻生の役を助く天正

網中を居く戰國の際佐々木氏據守し山本城又は高森城と稱す天正の末黒田孝高其弟兵庫頭を居き慶長中細川忠興其臣有吉武藏守を居き並に郡中を監せしむ

長洲氏

姓不知

封戸郷長洲城主長洲刑部左衛門尉吉綱應永五年大友

氏鑑に與し大内盛見と戰ふて利あらず因て滅ふ

市丸氏

姓不知

市丸氏辛島郷住の江村狐塚城主たり因て住ノ江氏と

稱す住ノ江大藏少輔時元應永五年大友氏鑑に與し大内盛見と戰ふて利あらず其後孫田原紹忍の臣となる

平田氏

宇佐姓

高家郷尾永井村城主平田立賀天文中亡ふ

木部氏

清原姓

正高の後裔岐部氏廣山郷に來り其氏を以て地名とな

し岐部村と曰ふ後木部に改む永祿十年七月十一日木部武藏守大友氏の軍に従ひ筑紫廣門と肥前岡部に戰ふて死す天文中掃部助天正中勘解由左衛門尉と云ふ者あり七年大友氏奉行吉岡鎮基宇佐大宮司安心院公糺所領元重八町を押取して勘解由左衛門尉に與ふ

廣山氏

田部^{タノベ}姓

廣山郷莊村に居る因て或は廣山氏と稱し或は莊氏と

稱す文安享徳の際莊若狹守と云ふ者あり

舊領地を有す其孫を大和守頼忠及び七郎頼基となす頼忠壘を乙女村原に築きて居る應永五年大友氏鑑に與して大内盛見と岩石城に戰ふて敗北す頼忠の子を惣左衛門尉盛種と曰ふ母は住江村狐塚城主市丸大藏少輔時元の女なり盛種馬ヶ嶽城主新田左馬助義高の女を娶る永享三年義高瀬社川に戰死するに及んで其遺領辛島郷の内を併領す其子太郎左衛門尉正直始めて大友豊前守政親に屬す其曾孫修理進秀清膂力あり天正九年十月二十九日死す年五十二其力持石と云ふ者今も長安寺に遺れり秀清孫喜右衛門尉忠秀十五年二月三好秀次に從ふて薩州に入る十七年三月黒田甲斐守長政の爲めに城地を沒收せられ庶人となり子孫連綿たり維孝曰く乙女村一に乙咩村と書けり
尾永井村一に小長居と書けり

葛原氏

姓不知 葛原郷葛原村城主葛原兵庫助則祐天文中亡ふ

山本氏

源 姓 佐々木三郎太夫頼綱の裔向野郷高森村山本城に居る因

て山本氏と稱す永正中山本莊左衛門尉重賢と云ふ者あり慶長中其後孫山本三卜醫を業とし子孫相繼て山本城下に住す近年佐々木大樹に至り去て大阪府下に住す死して嗣なし

因に此城一名寶森城と云ふ元暦中緒方三郎惟榮義經待受の城として之を築き其族賀來小太郎

白山に壘を築きて居り大城山ダイシロを外寨となす弘治三年丁巳七月十日死す年八十四其子日向守宗利家を繼ぎ永祿十二年己巳二月一日死す年六十二其子安藝守宗實其所領の地僻陬荒蕪なるにより元龜元年大友氏に返還して浪人となり新洞村に遷り更に拜田村に移り農に歸し拜田鞠負と稱す生山氏の祖なり慶長十九年二月十五日死す年八十三其族豐後速見郡大分郡及び豐前宇佐郡等に散在す鞠負長子十郎左衛門宗隆莊屋となり宇佐宮武官に列し子孫連綿たり

因に宗實次男小四郎實忠天資勇猛屢々人を殺害す因て父の勘當を受け自ら安部左京と稱し所々を徘徊す慶長五年大友義統に與し九月十二日吉弘嘉兵衛等十八人と石垣原に戦死す

土岐氏

源 姓

從五位下美濃守源光衡美濃國土岐郡に居る因て氏とす

其後孫土岐彌五郎賴資豐前宇佐郡高家郷乙女村尾永井村三千貫を領し豐前守と稱す其弟賴遠康永元年八月六日夜京師に在て樋口東洞院の御幸に陪して狼藉の舉あり四條河原に於て誅せられ其罪三族に及はんとす賴資乃ち步卒に混して京都を去り其領地乙女村に降り祝髪して豐前入道と稱す法名長安院殿玄參大禪定門今下乙女村字原清流山長安寺是なり其子大和守賴實應安四年九州探題今川貞世に従ひ肥筑の間に轉戦して死す其子彌五郎賴清大内義弘に屬し

園に移り西福寺を其邸側に復立す子孫尾立氏と稱し連綿たり

安倍氏

安倍姓

人皇二十一代安康天皇の皇子岩照名駿河國安倍野に

居る世人之を安倍皇子と稱す是れ安倍氏の初祖なり天武天皇十三年十一月戊申朔阿倍臣賜姓曰朝臣阿闕阿拜安倍安部阿部阿邊皆同一種姓なり岩照名皇子四十四世孫安倍衛門佐忠勝延長八年陸奥國磐井に移住す其六世孫安太夫賴時と云ふ者衣川に住す六子あり長を貞任次を宗任と曰ふ兄弟相率ひて叛く康平五年源義家の追討に逢ひ貞任戰死す宗任虜となりて京師に幽せらる治暦元年赦されて義家の臣となる永保三年肥前國松浦の地を賜ふ永久二年甲午三月十五日死す年八十三其嫡子松浦伊賀介宗直元永元年豐後國高崎山下白木村に移住す因て白木氏と稱す其曾孫安部主殿助宗時建久七年四月高崎城を大友能直に致し其臣となる宗時十五世孫小次郎偶宗の時に至り享祿三年大友家中種族争の事起る肥後の客衆中村左衛門佐本莊但馬守御紋衆清田越後守に撃たる偶宗は本莊但馬守の女婿たるを以て禍の其身に及はん事を恐れ病に託して領地替を願ひ宇佐郡烏帽子山下笠之口及び松本村の地に遷り山野を開拓し觀音堂を烏帽子山西の中腹に建て氏佛となす(今板場村普門山成就院の本尊是なり)茶

惟順正治中大叔父緒方三郎惟榮長子惟久子豐後海部郡佐伯莊梅牟禮城主戸次
後佐伯惟家の臣となり同莊堅田村に居る其十一世孫忠左衛門惟敦に至て嗣なし
 其主佐伯豐前守惟秀己れか次男與次郎惟幸をして曰杵氏を繼かしむ其子與之
 助惟準應仁二年大友豐後守親繁に仕ふ其子與太夫惟長永正元年大友備前守親
 治に従ひ豊前に入り所在を抄掠す

豊前國宇佐郡内尾立田畠荒野貳拾八町分知行所可宛行之狀如件

永正元年十月十日

親 治 花押

曰杵與太夫殿

因て尾立村ナカシタ仲下に居る十年八月十九日親治其甥義鑑の攻むる所となり速見郡
 塚原村にて嫡子義長と共に自殺す惟長乃ち無常を觀し本願寺に投し實如上人
 の弟子となり西願と稱す十七年還りて仲下に巖山西福寺を創立す其子と與吉
 惟晃其子と與太郎惟貫と云ふ惟貫妙見嶽城主田原紹忍に依り大友氏に仕へ天
 正五年十月一日美濃守に任す是年紹忍西福寺を燒毀す七年十一月惟貫紹忍の
 命に依り深見壹岐守等と下毛郡野仲重兼を撃つ十一年十月十八日時枝勢と戰
 ふて元重村に死す法名釋了徹其子與右衛門尉惟直慶長中尾立村莊屋となり中

年黒田氏筑前に轉封せしを以て玄幸津布佐莊檜本に來り其子忠助と共に居る八年七月十七日細川越中守忠興の家臣宇佐郡代有吉武藏守立行一揆凌へと稱し義統に加膽せし郡中の武士凡そ三十人を高森城に誘致して殺戮す玄幸及び忠助其害に遭ふ忠助遺子忠太夫寛永十一年小笠原信濃守長次に擧られて津房大莊屋となり高貳拾石を賜ひ五世勤續其子孫連綿たり

天文中中原村に岩男備前守と云ふ者あり又院内溫見谷にも岩男氏あり蓋し同族ならむ中原岩男氏の後孫宇佐宮武官となれり

岡氏 藤原姓 正和中岡和泉守成忠と云ふ者津布佐莊檜本に城を築き

て居る其子式部助に至て亡ふ成忠曾て天滿宮を城北に勸請す今現に存す

菅原の神のみすかたそのまゝにちとせふる宮をかめ氏人 佐々豐水後肥

岡氏菩提所會毛寺跡に梵字塔五六基遺れり其一基に梵字二字殘存す即ちアークタラクの二字にてアークは福智圓滿タラクは福德圓滿の義なり

津久見氏 姓不知 丹波守と稱す永正中津布佐莊六郎九村山之城主

たり蓋し大友氏の臣にて豊後海部郡津久見浦の出ならん其終焉詳ならず

白杵氏 大神姓 大神朝臣惟基五世孫白杵二郎惟隆四男惟明嫡子太郎

衛盛所持 古文書 文明中治部丞及び太郎と云ふ者あり

就行幸會合力事吉松治部丞同名太郎令難澁候與不可然候猶以兎角申候者急
度可參申明候由堅固可被申付候也恐々謹言

文明十五

十一月二十九日

武 道 花押

若宮權神主殿〔廣崎衛盛藏〕

治部丞の子を勘解由鎮俊と云ふ天文中亡ふ其遺族吉松兵部丞永祿九年三月麻
生の役を助け天正十七年三月一日中島城にて戰死す

岩男氏

源 姓

清和天皇十四世孫美濃守山田三郎右衛門繁弘保元の役

源氏を以て清盛に屬し彈正少弼に任す其苗字山の下に石を田の下に力を加へ
て岩男と稱す賴朝起るに及んで繁弘筑前に奔り三笠郡太宰府に隱る其後孫權
太左衛門尉重益大永元年八月大内氏に仕ふ其弟源太兵衛尉繁殊天文中大友氏
に仕へ宇佐郡深見郷に於て三十町を賜り龍王城衆に加り中務丞に任す天正十
七年三月黒田孝高の爲めに領地を沒收せらる慶長五年九月大友義統に與し孝
高と豊後石垣原に戰ひ敗れて築城郡城井谷に隱れ中務入道秋觀玄幸と號す是

職となる貞應元年其子清直嗣く

當宮領高家郷犬丸犬太郎田畑等任郷司清保護可子息清直領掌者依 御氣色
下知如件

貞應元

四月九日

右衛門權佐 花押

宇佐大宮司

宿

建武中又五郎清禰と云ふ者宇佐八幡宮神官兼犬太郎犬丸兩名地頭職となり足
利尊氏に屬す其子清光嗣く應永二十二年九月二十日家を嫡子小宮司丸に譲る
永祿中出羽守光頼及び内藏丞辰清と云ふ者あり中島氏の被官となる天正五年
二月九日辰清家を今八郎に譲る十七年三月一日光頼中島城にて戰死す

吉松氏

宇佐姓

正平十一年三月七日宇佐八幡大宮司公浦辛島葛原兩

郷の内平田別府吉松名地頭職を其子六郎公令に譲る因て氏とす其子公吉嗣く
應永七年十月二十四日公吉入道玄干其領地を嫡子吉松九郎左京亮公興次男十
郎公直に分與す公興子なし其族小原小次郎公益に譲る公益吉松氏を冒す
以上廣崎

稱す天文中武藏守末實と云ふ者あり後四日市渡邊氏の被官となり其終焉詳ならす

平井氏

清原姓

正高子正通四男平井四郎高重の裔に元弘中平井總七朝通と云ふ者あり其子平井清十郎入道了源と云ふ者建武中足利尊氏に屬し貞和三年宇佐郡別府村那何尾名地頭職に補す其滅亡年代詳ならず

豊前國別府村那何尾名

合屋豐後大
夫入道跡

地頭職之事任去年正月六日御奉書同八月

十三日御教書之旨沙汰附平井清十郎入道了源候訖仍請取狀一通令進上之候若此條僞申候者

八幡大菩薩御罰於可罷蒙候以此旨可有御披露候恐惶謹言

貞和四年三月二十五日

山本七郎

宇佐

盛宣上

裏に
花押

深見孫五郎

和

武光

花押

金光氏

漆島姓

建久中金光佐渡守清保高家郷犬丸、犬太郎兩名の地頭

(葛原村福本新三郎藏)

八幡宇佐宮大宮司職巡役事

御判御奉書如此然任被仰出之旨可被沙汰渡到津公弘之由候也
仍執達如件

享德二年十二月十五日

伯耆守 花押

莊若狹入道殿（到津男爵藏）

永正中廣山加賀守正直と云ふ者あり廣山八幡宮別當彌勒寺を創造し弟雙富隣
公元禪師をして住持せしむ廣山莊四方指左の如し

廣山莊之由來

廣山莊は東西南北四方指之正中以莊稱莊村廣山莊御正門奉備八幡宮垂跡也

莊廣山加賀守 田部正直

天文十三歲甲辰四月八日

南之界は横山之莊

北之界は海邊

西之界は中尾之莊

東之界は平田之莊

正直天文二十三年甲寅十一月二十日死す法名前加州大守賀叟長慶居士覺靈其
子を忠兵衛重直と曰ふ越後守に任す永祿九年三月大友氏麻生の役を助く天正

綱中を居く戰國の際佐々木氏據守し山本城又は高森城と稱す天正の末黒田孝高其弟兵庫頭を居き慶長中細川忠興其臣有吉武藏守を居き並に郡中を監せしむ

長洲氏 姓不知 封戸郷長洲城主長洲刑部左衛門尉吉綱應永五年大友

氏鑑に與し大内盛見と戰ふて利あらず因て滅ふ

市丸氏 姓不知 市丸氏辛島郷住の江村狐塚城主たり因て住ノ江氏と

稱す住ノ江大藏少輔時元應永五年大友氏鑑に與し大内盛見と戰ふて利あらず其後孫田原紹忍の臣となる

平田氏 宇佐姓 高家郷尾永井村城主平田立賀天文中亡ふ

木部氏 清原姓 正高の後裔岐部氏廣山郷に來り其氏を以て地名とな

し岐部村と曰ふ後木部に改む永祿十年七月十一日木部武藏守大友氏の軍に従ひ筑紫廣門と肥前岡部に戰ふて死す天文中掃部助天正中勘解由左衛門尉と云ふ者あり七年大友氏奉行吉岡鎮基宇佐大宮司安心院公胤所領元重八町を押取して勘解由左衛門尉に與ふ

廣山氏 田部姓 廣山郷莊村に居る因て或は廣山氏と稱し或は莊氏と

稱す文安享德の際莊若狹守と云ふ者あり

舊領地を有す其孫を大和守頼忠及び七郎頼基となす頼忠壘を乙女村原に築きて居る應永五年大友氏鑑に興して大内盛見と岩石城に戰ふて敗北す頼忠の子を惣左衛門尉盛種と曰ふ母は住江村狐塚城主市丸大藏少輔時元の女なり盛種馬ヶ嶽城主新田左馬助義高の女を娶る永享三年義高瀬社川に戰死するに及んで其遺領辛島郷の内を併領す其子太郎左衛門尉正直始めて大友豊前守政親に屬す其曾孫修理進秀清膂力あり天正九年十月二十九日死す年五十二其力持石と云ふ者今も長安寺に遺れり秀清孫喜右衛門尉忠秀十五年二月三好秀次に從ふて薩州に入る十七年三月黒田甲斐守長政の爲めに城地を沒收せられ庶人となり子孫連綿たり維孝曰く乙女村一に乙咩村と書けり

葛原氏

姓不知

葛原郷葛原村城主葛原兵庫助則祐天文中亡ふ

山本氏

源 姓

佐々木三郎太夫頼綱の裔向野郷高森村山本城に居る因

て山本氏と稱す永正中山本莊左衛門尉重賢と云ふ者あり慶長中其後孫山本三卜醫を業とし子孫相繼て山本城下に住す近年佐々木大樹に至り去て大阪府下に住す死して嗣なし

因に此城一名寶森城と云ふ元暦中緒方三郎惟榮義經待受の城として之を築き其族賀來小太郎

白山に壘を築きて居り大城山ダイシロを外寨となす弘治三年丁巳七月十日死す年八十四其子日向守宗利家を繼ぎ永祿十二年己巳二月一日死す年六十二其子安藝守宗實其所領の地僻陬荒蕪なるにより元龜元年大友氏に返還して浪人となり新洞村に遷り更に拜田村に移り農に歸し拜田靱負と稱す生山氏の祖なり慶長十九年二月十五日死す年八十三其族豊後速見郡大分郡及び豊前宇佐郡等に散在す靱負長子十郎左衛門宗隆莊屋となり宇佐宮武官に列し子孫連綿たり

因に宗實次男小四郎實忠天資勇猛屢々人を殺害す因て父の勘當を受け自ら安部左京と稱し所々を徘徊す慶長五年大友義統に與し九月十二日吉弘嘉兵衛等十八人と石垣原に戦死す

土岐氏

源

姓

從五位下美濃守源光衡美濃國土岐郡に居る因て氏とす

其後孫土岐彌五郎賴資豐前宇佐郡高家郷乙女村尾永井村三千貫を領し豐前守と稱す其弟賴遠康永元年八月六日夜京師に在て樋口東洞院の御幸に陪して狼藉の舉あり四條河原に於て誅せられ其罪三族に及はんとす賴資乃ち步卒に混して京都を去り其領地乙女村に降り祝髪して豐前入道と稱す法名長安院殿玄參大禪定門今下乙女村字原清流山長安寺是なり其子大和守賴實應安四年九州探題今川貞世に従ひ肥筑の間に轉戦して死す其子彌五郎賴清大内義弘に屬し

園に移り西福寺を其邸側に復立す子孫尾立氏と稱し連綿たり

安倍氏 安倍姓

人皇二十一代安康天皇の皇子岩照名駿河國安倍野に居る世人之を安倍皇子と稱す是れ安倍氏の初祖なり天武天皇十三年十一月戊申朔阿倍臣賜姓曰朝臣阿閔阿拜安倍安部阿部阿邊皆同一種姓なり岩照名皇子四十四世孫安倍衛門佐忠勝延長八年陸奥國磐井に移住す其六世孫安太夫賴時と云ふ者衣川に住す六子あり長を貞任次を宗任と曰ふ兄弟相率ひて叛く康平五年源義家の追討に逢ひ貞任戰死す宗任虜となりて京師に幽せらる治暦元年赦されて義家の臣となる永保三年肥前國松浦の地を賜ふ永久二年甲午三月十五日死す年八十三其嫡子松浦伊賀介宗直元永元年豐後國高崎山下白木村に移住す因て白木氏と稱す其曾孫安部主殿助宗時建久七年四月高崎城を大友能直に致し其臣となる宗時十五世孫小次郎偶宗の時に至り享祿三年大友家中種族爭の事起る肥後の客衆中村左衛門佐本莊但馬守御紋衆清田越後守に擊たる偶宗は本莊但馬守の女婿たるを以て禍の其身に及はん事を恐れ病に託して領地替を願ひ宇佐郡烏帽子山下笠之口及び松本村の地に遷り山野を開拓し觀音堂を烏帽子山西の中腹に建て氏佛となす(今板場村普門山成就院の本尊是なり)茶

惟順正治中大叔父緒方三郎惟榮長子惟久子豐後海部郡佐伯莊梅牟禮城主戸次
伯佐惟家の臣となり同莊堅田村に居る其十一世孫忠左衛門惟敦に至て嗣なし
 其主佐伯豊前守惟秀己れか次男與次郎惟幸をして曰杵氏を繼かしむ其子與之
 助惟準應仁二年大友豊後守親繁に仕ふ其子與太夫惟長永正元年大友備前守親
 治に従ひ豊前に入り所在を抄掠す

豊前國宇佐郡内尾立田畠荒野貳拾八町分知行所可宛行之狀如件

永正元年十月十日

親 治 花押

曰杵與太夫殿

因て尾立村ナカシタ仲下に居る十年八月十九日親治其甥義鑑の攻むる所となり速見郡
 塚原村にて嫡子義長と共に自殺す惟長乃ち無常を觀し本願寺に投し實如上人
 の弟子となり西願と稱す十七年還りて仲下に巖山西福寺を創立す其子を與吉
 惟晃其子を與太郎惟貫と云ふ惟貫妙見嶽城主田原紹忍に依り大友氏に仕へ天
 正五年十月一日美濃守に任す是年紹忍西福寺を燒毀す七年十一月惟貫紹忍の
 命に依り深見壹岐守等と下毛郡野仲重兼を撃つ十一年十月十八日時枝勢と戰
 ふて元重村に死す法名釋了徹其子與右衛門尉惟直慶長中尾立村莊屋となり中

年黒田氏筑前に轉封せしを以て玄幸津布佐莊檜本に來り其子忠助と共に居る八年七月十七日細川越中守忠興の家臣宇佐郡代有吉武藏守立行一揆浚へと稱し義統に加膽せし郡中の武士凡そ三十人を高森城に誘致して殺戮す玄幸及び忠助其害に遭ふ忠助遺子忠太夫寛永十一年小笠原信濃守長次に舉られて津房大莊屋となり高貳拾石を賜ひ五世勤續其子孫連綿たり

天文中中原村に岩男備前守と云ふ者あり又院内溫見谷にも岩男氏あり蓋し同族ならむ中原岩男氏の後孫宇佐宮武官となれり

岡氏

藤原姓

正和中岡和泉守成忠と云ふ者津布佐莊檜本に城を築きて居る其子式部助に至て亡ふ成忠曾て天滿宮を城北に勸請す今現に存す

菅原の神のみすかたそのまゝにちとせふる宮をかめ氏人

佐々豐水後肥

岡氏菩提所會毛寺跡に梵字塔五六基遺れり其一基に梵字二字殘存す即ちアークタラクの二字にてアークは福智圓滿タラクは福德圓滿の義なり

津久見氏

姓不知

丹波守と稱す永正中津布佐莊六郎九村山之城主たり蓋し大友氏の臣にて豐後海部郡津久見浦の出ならん其終焉詳ならず

白杵氏

大神姓

大神朝臣惟基五世孫白杵二郎惟隆四男惟明嫡子太郎

衛盛所持 古文書 文明中治部丞及び太郎と云ふ者あり

就行幸會合力事吉松治部丞同名太郎令難澁候與不可然候猶以兎角申候者急
度可參申明候由堅固可被申付候也恐々謹言

文明十五

十一月二十九日

武 道 花押

若宮權神主殿(廣崎衛盛藏)

治部丞の子を勘解由鎮俊と云ふ天文中亡ふ其遺族吉松兵部丞永祿九年三月麻
生の役を助け天正十七年三月一日中島城にて戰死す

岩男氏

源 姓

清和天皇十四世孫美濃守山田三郎右衛門繁弘保元の役

源氏を以て清盛に屬し彈正少弼に任す其苗字山の下に石を田の下に力を加へ
て岩男と稱す賴朝起るに及んで繁弘筑前に奔り三笠郡太宰府に隱る其後孫權
太左衛門尉重益大永元年八月大内氏に仕ふ其弟源太兵衛尉繁殊天文中大友氏
に仕へ宇佐郡深見郷に於て三十町を賜り龍王城衆に加り中務丞に任す天正十
七年三月黒田孝高の爲めに領地を沒收せらる慶長五年九月大友義統に與し孝
高と豊後石垣原に戰ひ敗れて築城郡城井谷に隱れ中務入道秋觀玄幸と號す是

職となる貞應元年其子清直嗣く

當宮領高家郷犬丸犬太郎田畑等任郷司清保護可子息清直領掌者依 御氣色
下知如件

貞應元

四月九日

右衛門權佐 花押

宇佐大宮司

宿

建武中又五郎清轉と云ふ者宇佐八幡宮神官兼犬太郎犬丸兩名地頭職となり足
利尊氏に屬す其子清光嗣く應永二十二年九月二十日家を嫡子小宮司丸に譲る
永祿中出羽守光賴及び内藏丞辰清と云ふ者あり中島氏の被官となる天正五年
二月九日辰清家を今八郎に譲る十七年三月一日光賴中島城にて戦死す

吉松氏

宇佐姓

正平十一年三月七日宇佐八幡大宮司公浦辛島葛原兩

郷の内平田別府吉松名地頭職を其子六郎公令に譲る因て氏とす其子公吉嗣く
應永七年十月二十四日公吉入道玄干其領地を嫡子吉松九郎左京亮公興次男十
郎公直に分與す公興子なし其族小原小次郎公益に譲る公益吉松氏を冒す

以上
廣崎

稱す天文中武藏守末實と云ふ者あり後四日市渡邊氏の被官となり其終焉詳ならす

平井氏

清原姓

正高子正通四男平井四郎高重の裔に元弘中平井總七朝通と云ふ者あり其子平井清十郎入道了源と云ふ者建武中足利尊氏に屬し貞和三年宇佐郡別府村那何尾名地頭職に補す其滅亡年代詳ならず

豐前國別府村那何尾名

夫合屋豐後大

地頭職之事任去年正月六日御奉書同八月

十三日御教書之旨沙汰附平井清十郎入道了源候訖仍請取狀一通令進上之候

若此條僞申候者

八幡大菩薩御罰於可能蒙候以此旨可有御披露候恐惶謹言

貞和四年三月二十五日

山本七郎

宇佐

盛宣上

裏に花押

深見孫五郎

和

武光

花押

(葛原村福本新三郎藏)

金光氏

漆島姓

建久中金光佐渡守清保高家郷犬丸、犬太郎兩名の地頭

就親正覺慮外之儀拙者事至由布院令堪忍候之處榮閑被開召付候而至紹鐵公被仰付以御上意今度歸住之儀仕候誠榮閑御高恩之段忤家有限忘却之儀仕間敷候就夫被成御辛勞候之條爲御祝儀下小城內名之儀進入候吾等到子々孫々可被成御存知候若於子孫族申仁於有之者蟾光菴地藏同西光寺藥師并氏神可被蒙御訝候毛頭右之至名從此方不可有綺之儀候仍爲後日狀如件

月俣太郎

員 貞 花押

蟾光座

禪 智 花押

太郎母

妙 正

惠良榮閑公

人々御中 (惠良彦四郎藏)

因に日岳村河野氏は蓋し月股氏の宗家なり

横山氏 宇佐姓 宇佐頼房の裔高家郷横山莊山下保に居る者横山氏と

す十四年十二月十五日大友義統府内城を捨て龍王城に來る新五兵衛馳走す十五年二月九日義統之を賞して偏諱を賜ふ因て玄蕃允統廣と稱す其玄孫助之進知廣に至て元祿十一年妻垣八幡宮司を罷め下市村三女神社職となり新原村に

移り子孫連綿たり

月股氏

越智姓

河野氏深見郷院内月股村に居る因て氏とす應永三十

三年十一月二十九日大友家に三角畑の變あり大友陸奥守親著亂兵の爲に害せられ長子孝親又自殺しければ老臣相議して二男花市丸を立んとす花市丸以爲らく兄孝親猛戾にして父の心になはす遂に父子とも悲慘の事に及へり縦ひ我國家を有つても何の光榮かあらんと夜に乗して潜に遁去る月股氏陰に之を匿す老臣之を聞き強て歸城せしむ然れとも花市丸幼少を以て固辭して立たす親世の子持直嗣て立ち刑部大輔に任す既にして持直自ら安んぜす永享五年家を花市丸に譲る左京大夫親綱是なり月股氏子孫相繼き天文中普請兵衛入道正覺と云ふ者あり下毛郡長岩城主野仲重兼に屬す天正七年重兼に與し大友氏の滅する所となる其子太郎員貞逃れて豊後由布院に在り惠良備前守秀盛入道榮閑大友氏の將田北紹鐵に哀訴して罪を赦され月股に歸住す

康元二後三月十八日

玄 蕃 助 花押

妻垣社司殿 (妻垣神社藏)

胤氏玄孫小次郎道秀足利尊氏に屬して功あり貞和五年丙午四月八日向野郷矢部村の内若干を賜ふ其七世孫を縫殿允廣秀と云ふ弟勘助と共に永享七年三月菊池武忠に與し安心院中務大輔公重か居城龍王を攻む廣秀九世孫に左衛門三郎道著と云ふ者あり

津布佐莊瀧貞名河坂山野井田畑等事近年末〇之様候太以不可然早々存入申令糺明子細等急度可被遂注進候近日至京都可申上候聊不可有〇之候油斷之儀候此にて能々可申之旨恐々謹言

永正十二 二月六日

道 德 花押

新開左衛門三郎殿

大口田重兵衛尉殿 (瀧貞莊一藏)

道著五世孫を四郎廣澄と云ふ其弟に新五兵衛と云ふ者あり天正十年十月十二日探題田原親盛の兵來て安心院公正を攻む公正子千代松丸之を櫛野越に邀へて戰ふ新五兵衛其背後に起て千代松丸を襲ふ是に於て千代松丸主従九人戰死

中九千々代九殿（以上二通中山本太郎藏）

千々代九後に左馬助と稱し其弟を彈正忠と稱す二十年九月大内義隆亡滅の後大友義鎮に屬し弘治二年九月二十六日門司城を攻めて之を復す天正中進士允及び左近助鎮道と云ふ者あり鎮道天正十三四年の交田原紹忍に屬し其軍務に馳走す其子を角右衛門と云ふ寛永九年十二月二十三日細川氏の時恒松村高三拾石を賜ひ莊屋となり子孫連綿たり

被官田之口雅樂助

新開氏

平 姓

一品葛原親王三十三世孫從五位下新開越中守廣長建久七年三月大友能直に従ひ鎌倉より來りて野麻^ヌ郷木之裳村瀧之下に居る今安心院村大字木之裳字西光寺と云ふ處に貳反貳拾七歩の田地あり是れ其宅址なり寶治二年戊申十一月二十日其子四郎廣忠妻垣八幡宮司兼新開庄^{今古市}村の内地頭職に補す其子と玄番助胤氏と云ふ

造宇佐宮内妻垣社本役外院玉垣一間事支配彼社御敷地拾町可被勸造之由兩方御承伏候了然者座主分田地貳町取課○可被催促候仍社司分田地八町課○早速可令遂造營給候更々不可有御○怠候也恐々謹言

儀候共聊不可有氣遣候仍中結一折到來祝著に候恐々謹言

閏三月十日

紹 忍 花押

衛藤彌三郎殿

秀重子修理秀俱莊屋となり瀧貞氏と稱し子孫連綿たり

中山氏

藤原姓

衛藤親重の族中山に居る者を中山氏となす嘉吉中内膳正正房城を田之口村潰山に築き大内氏に屬す文安三年八月二日深見領分四方指證文に連署す大永中太郎左衛門尉重生と云ふ者あり天文三年四月六日大牟禮山の役に從ふ

去六日於豐後國山香郷大牟禮山合戰之時敵二人討捕之由猶七郎重信注進并軍忠狀同頭到來了彌可勵功之狀如件

天文三年四月十七日

花

押 大内義隆

十二年五月八日出雲國湯濱に戰死す

去五月八日於出雲國湯濱合戰之時父太郎左衛門尉重生討死無是非次第也於忠節者感悅無極同郎從田中彥次郎討死云々尤神妙彌可抽勤功之狀如件

天文十二年七月三日

花

押

同上

種 秀 花押

有田土佐守

家 久 花押

瀧貞名主

彦房所

武貞名は南北朝合一の後足利氏を憚り此地に飛瀧あるに因り瀧貞名に改め

きと云ふ

因に當時菊池氏肥後菊池郡隈府に居り山傳ひに豊後豊前に往來す菊池武時墓日田郡石井郷南高瀬村に在り但し武時は元弘三年三月十二日太宰府にて戦死せしなり

永享中正廣下毛郡津民莊檜原山の僧徒和仁ワニの爲めに滅せらる和仁は蓋し大友氏の使囑を受けしならん其遺子三郎左衛門正秀其子太郎秀長其子兵庫頭秀春を経て兵庫助秀光に至り永祿中田原紹忍に屬す其子を彌三郎秀重と云ふ天正六年大友氏耳川に大敗せしより郡内動亂すと雖も秀重節を變せず

就今度郡内動亂諸人覺悟雖無實所候其方事依無別儀最前以來惠良帶刀兵衛尉申談動○之刻馳走之由神妙候然上者早々屋敷可下居事肝要候自然風説之

きりかけ訖かの所をしのけ候間納所一貫五百文おひさため訖末代まで可拘
仍地頭恒松三郎盛幸申定候てとらせ候間子孫においてとかく申物あるまじ
く候四方堺之事東をかきる所へ山河たち南は記太郎畑西のむた水なかれを
見わたす西は河たち北は松尾水なかくみちまで此内においてゐらんさまた
け申物あるましく仍爲後日之定狀如件

じやうへい五年十月十八日

つねまつ盛幸 花押

武定へんさし殿

正平五年は北朝觀應元年なりへぬさし又はへんさしは辨濟使なり鎌倉右大
將の時より起れる官名なり後世略して辨指ゼンと書き莊屋の下役となりぬ
親重子源左衛門正榮其子兵衛三郎正長を経て彦左衛門正廣に至る

豊前國宇佐郡津布佐莊散在恒松名内瀧貞名名主職之事親兵衛三郎讓與上者
如手續次第相續可相拘之仍四方堺目等事者本主恒松盛幸去正平五年十月十
八日可任下知狀之旨者也縱親類中寄事於左右申慥族候共不日遂注進者其時
一段可被相究之由依仰仍狀如件

永享九年二月十二日

原田左馬助

の後の山腹に菴を立て靈泉寺と名け阿彌陀如來を安置す後來寺を山下に移す其子善左衛門則一歸農し後莊屋となり子孫連綿たり其居邸の址に局屋敷射場の本なこの字今に存れり

因に茶白山を笠之口日向守の居城と云ふは誤れり是れは安倍日向守宗利の居城なり

德野尾氏

姓不知

深見郷餘り谷上納持村に居る十郎左衛門と稱す

天文中隣邑齋藤駿河守の爲めに滅せらる其城址をツルガイ通臺と云ふ瀧貞の瀑流に臨み要害の地なり其北に的場と云處あり弓を射たる處なりとそ德野尾氏は得能氏の後なる歟又餘り谷の平原村に現に德野氏あり其後裔ならん

衛藤氏

藤原姓

其先衛藤某建久七年大友左近將監能直に従ひ豐後に

來る其後孫彌三郎親重勤王の志あり正平の初(北朝貞和中)豐後を去り宇佐郡院内恒松名中山に來り恒松莊司三郎盛幸に依る其後正平五年中山谷の奥に至り山野を開拓して居る此地一城あり三面巖壁峭立し一方高山に續き堀割を以て割斷し之を陣ヶ尾と云ふ菊池二郎定時入道寂阿の第十四子對馬守武貞の築く所なり因て此地を武貞名と稱す

豐前國宇佐こおりゐんない恒松之内たけさた名之事いまのへぬさし彌三郎

因に額に肥後加藤氏の舊臣にて本姓後藤氏なり其父此に來て農に歸す享保二年二月丹後宮津城主從五位下奥平大膳大夫昌春中津城拾萬石に徙封せられ十月封に就き領内を巡視す與三左衛門昌春に謁し鷄卵を盆に盛り獻上す昌春見て曰く鷄卵配列の形恰も額に似たりとはより額氏を稱す盛時の祀られざるを悲しみ碑を建つと云深見郷森村舊庄屋深見平藏八十八翁話

香淨寺氏

和 姓

深見氏の族深見郷森村の山上に壘を築きて居り香淨寺氏と稱す應安中伊賀守房直と云ふ者大内左京大夫義弘に屬し官軍菊池肥後守武朝と戰ふて利あらず其家世々伊賀守と稱す弘治二年八月三日妙見嶽城探題田原近江守親賢松木和泉守正直に命して來り攻めしむ香淨寺乃ち落去す今も此地を伊賀屋敷と云ひ森村西と云ふ處に香淨寺と稱する佛堂あり

筌之口氏

藤原 姓

大職冠鎌足の後孫筌之口日向守範久孫民部範忠

延元元年新田義貞に従ひ越後杣山城に戰死す其子範保流浪して豊前宇佐郡時枝に來る其子を司郎範勝小次郎範一と云ふ範一大内氏に屬し龍王城衆となる其子を甚左衛門範定となす永享七年三月新開縫殿允龍王城を攻むるに當り範定防戰功あり深見郷の一谷を賜ふ因て其氏を地名に負はせて筌之口村と曰ふ文安中日向守清久と云ふ者あり深見領分四方指證文に連署す其後孫幸之丞重範天文三年四月六日速見郡山香郷大牟禮山の役に従ひ歸村の後入道して居耶

文安三年八月二日

深見河内守

盛 行 花押

右田佐渡守

直 高 花押

筈之口日向守

清 久 花押

帆足越後守

總 繁 花押

中山内膳正

正 房 花押

深見河内守殿 (龍王村末松金吾藏)

其孫河内守盛時に至り大永三年

深見氏系圖

大友修理大夫義鑑の爲めに攻められ

一族皆自殺す其城址今も大村に存し内城外城等の地名あり或は曰く深見氏一

に中間氏を稱しきと内城に碑あり表に三界萬靈有無兩縁右側に深見河内守廟

所左側に享保九年甲辰六月十五日願主額與三左衛門と刻す

深見左衛門藏人殿（上高村辛島長米藏）

應安四年其子太郎河内守政直大内左京大夫義弘に屬し官軍菊池肥後守武朝と戦ふて利あらず其孫河内守盛行四隣領主と約して境界を定む即ち左の如し

豐前國宇佐郡深見領分四方指之事

一東は口戸之田之北之外より東之尾道を登り柴山之横道を西え通す

惠良越之道を登り芥神と申所有是迄は東は筈之口領西は深見領分也芥神之石佛より大道登り黒土原一之堀と申は東西に流れ山溝有り夫より西に見て立石と申石有夫より上に武藏と申て西東に尾有此嶺より水分に南は豐後之内北は豐前領也是尾を西へ行て落合と申谷有夫より齋藤墓に上る道有齋藤墓と申は爲末代豐前豐後之境之驗に死骸を埋墓を築置たる處也夫より西は花木原と申山木浦尾筋を西に行て壹本樗と申木有是迄は南差境也夫より鈴ヶ塚と申峰に上り北に續たる尾道を下り桂ヶ峠之大道を下り仙ヶ畑と申田を限り是所より道貳筋分る西之道に行て船板平之尾道を下り臼ヶ塚に到る也是迄は西之差境也夫より北に下て大岩寺之横道を限り若宮之神前より三丁下りて大河之石橋を東に渡り口戸に限る也右四方指相定所之狀如件

村深見基愛弟基直(大神姓)を養ふて嗣となす正和中右近五郎廣政と云ふ者あり

宇佐宮供僧神堯申豐前國向野鄉田肆段島號河事

右田地一圓神領神堯相傳之地也而同國酒井石見房神成知行之上任興行之法可返給之由帶對馬前司公世宿禰舉狀訴申之間去四月一日仰深見右近五郎廣政下召文之處如廣政去月十六日請文者雖相觸石見房不及散狀云々起請詞者違背之件難遁然則於彼田者所被付社家也者依仰下知如件

正和二年六月二日

前上總介平朝臣 花押

(法鏡寺北正樹藏)

元應中深見彌次郎(津房氏條參照)曆應中深見五郎太郎貞和中深見孫五郎武光平井氏條參照)正平中左衛門藏人と云ふ者あり

八幡宇佐宮神官並居申當宮領豐前國辛島葛原鄉之内時成末正高村次郎九名內宗朗跡已下田畑屋敷山野等事

去月六日○御教書如此任被仰下候旨守護代相共莅彼所止上毛彥三郎忠本押妨付下地於並居載起請詞可被注申候仍執達如件

正平十二年十二月十七日

筑後守 花押

渡邊和泉守殿

又惠良太郎鎮盛と云者あり大友家執事なるか如し

盛昌盛綱の子を治部丞盛俊と云ふ父盛昌の讓を承けて院内恒松名内溝野玖段

四拾代の内迫名田畑山野を領す大永三年六月十八日盛俊之を其子彌七郎盛繁に讓與す盛繁亦治部丞と稱す

對馬守所望事可令舉京都之狀如件

弘治元年十月二十七日

花

押大内介
義長

惠良治部丞殿 (惠良彦四郎藏)

天文の末より永祿中に惠良美濃守と云者あり大友氏に屬す是れ盛繁の事歟又は別人なる歟

惠良和泉守と云ふ者天文中羽馬禮村城に居る天正七八年の交惠良帶刀兵衛尉と云ふ者あり瀧貞衛藤彌三郎に合力して田原紹忍に同心す弘治永祿中惠良左京亮惠良肥前守と云ふ者あり左京亮は下惠良城に居ると云ふ

地頭二十九家弘治二年四月大友義鎮宇佐郡に臨めり時既に滅亡し又は小弱にして自立すること能はざる者

深見氏

和姓

兼守と云ふ者深見郷大村に居る因て氏とす子なし水車

裁許并去四月十六日讓狀等之旨惠良三郎信勝可相續領掌之狀如件

天文十二年十月十一日 (同上)

二十年七月九日三郎彈正忠に任す其終焉詳ならず永祿中大友氏秋月の役に惠良平左衛門尉と云ふ者あり田北大和守に屬す是其後歟又天文の末より弘治中に惠良小次郎鎮常と云ふ者あり龍王城に抵り大友義鎮に降參せしか如し因て或は宇佐郡衆に列し或は大友氏の執事となる是三郎の子なる歟

義 鎮 花押 (四日市渡邊義作藏)

領地野村分之内狐塚荒野任筋目預け遣四方差之事

此内田地之

東者嶺尾立草爪の池を限る南者小尾倉の迫尻無尾を限る西者横山大道を限る北者木行坂清水を限る

右之立山○○○○尤專一候於然者濟物辻之事從山立樣可申定候之條每年馳走干要候萬一諸濟無沙汰之時者可改易者也仍爲後日狀如件

弘治四年

惠良小二郎

八月二十六日

鎮 常 花押

天正六年大友氏耳川大敗の後惠良左介と云ふ者あり大門小河内の地を進止し
田原紹忍に同心す是れ其後歟

今度宇佐社中之者共企一雅意候條閉目之儀申出候處田原近江入道以同心別
而馳走之段感入候必其境取鎮一稜可賀之候恐々謹言

十二月三日

義 統 花押

惠良左介殿 (同上)

惠良隱岐守三郎盛綱大内氏に屬し永正十三年七月二十一日田河郡弓削田庄内

六町^{松岡新}宇佐郡恒松名内小河内屋敷^{長壽寺領云々}本旦^{那三三郎}左二ヶ所を

賜ひ天文六年九月十一日京都郡吉田庄内野原分八町七段四十五代^{梅月彌五郎}先知行築

城郡德市名貳町地を七年八月十六日筑後國三井郡鯨坂庄之内中村分十五町を

十年十二月十日長門國豐西郡内室津五石足豐東郡内府中五石足同國阿武郡賀

年郷内捌石足地^{原田新四郎}先知行を賜ふ十二年五月九日出雲國宍道に戰死す十月十一

日其子三郎信勝相續す

義 隆 花押

父盛綱一跡事任去永正十三年七月二十一日凌雲寺殿同天文六年九月十一日

五代地等事

右以大神秀盛所宛行也者 在廳官人等宜承知依宣行之以宣

天文十七年六月四日

大貳多々良朝臣

花押

大内義隆

(同上)

二十四年閏十月二十五日更に宇佐郡長副十三町地を賜ふ弘治中自ら隱居して榮閑と號し家を其子右衛門大夫に譲る右衛門大夫其父と共に永祿十二年九月大内輝弘に従ひ防州に入る十月二十五日輝弘都濃郡浮野の茶臼山にて毛利氏の兵と戦ひ衆寡敵せず力盡きて自殺し之に従ふ者大半戦死したれば右衛門大夫も亦其中に在るか如し

就今度入國行之儀父備前入道自最前馳走段尤神妙候殊雖爲老體此節可供奉之趣感悅非一候以此續重而之渡海於無緩者爲其賞於防長兩國之間明所次第百石足可宛行候條向後之儀彌心懸之馳走肝要候恐々謹言

九月十一日

輝弘 花押

惠良右衛門大夫殿 (同上)

惠良氏 大神姓

惠良若狹守賴盛と云ふ者大永天文の間大内氏に屬し
院内恒松名の内荻迫村に城を築きて居る二子あり長子を右馬助次子を清三郎
と云ふ天文五年八月十八日其所領たれかとはん名の内を右馬助に恒松名の内
見その、村の内居屋敷一所外十四所を清三郎に譲與す右馬助戰功に依り二十
二年三月二十七日京都郡吉田莊大分宮領内保仁寺領七段半を賞賜せらる後大
友氏に屬す備前守に任し鎮秀と稱す永祿二年二月九日家を其子左馬助に譲る
大友義鎮偏諱を賜ひて鎮實と名く

一字之事鎮實進之候恐々謹言

卯月十二日

義 鎮 花押

惠良左馬助殿 (惠良彦四郎藏)

鎮實荻迫の地不便なるより西惠良に城を築きて移る永祿中田北大和守紹鐵に
屬し大友氏の軍役に従ふ後名を鎮連と改め左馬入道と稱す天正六年九月二十
八日家を惠良四郎に譲る

惠良備前守秀盛大内氏に屬し天文十七年六月四日京都郡吉田庄の内五町六段
三十五代地を賜ふ

大府宣 太宰府廳官人等可任早廳宣管豐前國京都郡吉田庄内五町六段三十

新五左衛門尉林與右衛門川顏治兵衛尉恒吉縫殿助同善太郎吉松兵部丞等千五百餘騎と籠城す三月朔日長政兵三千を率ひ時枝平太夫を嚮導として來り攻む中島民部丞同彈正忠同主殿助同雅樂助等百四十餘人門を開て突出し奮戰して死す日暮統次自ら出て戰はんとす恒吉縫殿助之を諫めて豊後に走り大友氏に依らん事を勸む乃ち夜竊かに城を出て殘兵十三騎と共に速見郡向野に至り外舅松尾民部の家に宿す民部之を長政に告く三日追兵三百餘騎來り圍む統次小丘に上り強弓を射て十五六騎を斃し自ら屠腹して死す法名を光誠院貞譽英胤長阿居士と云ふ遺子鎮直基直逃れて京都郡馬ヶ嶽に隠れ後歸村し秀祐の遺子統俊と共に家を興し子孫宇佐宮武官となり連綿たり

先書如申候其表爲檢使田北左近將監河野傳兵衛入道差遣候於干今者諸口及行候條各申談急度以乘船別而可被勵忠儀事賴入候於樣體者去春申含候條不能書載候猶口上申候恐々謹言

十一月四日

義 統 花押

中島彦次郎殿

彦次郎は中島氏の族なり此書天正七年より十四年までの物ならむ

忠儀事干要候、何様隨粉骨一稜可申談覺悟候條望之儀共者、以時分可承候不可有別儀候恐々謹言

九月二十日

鎮 繼 花押

中島伊豫守殿

進之候

八年平太夫等再ひ來り攻む十年四月廿三日廿四日大友氏與力渡邊寄合衆等時枝城を攻む十三年三月平太夫竊かに使を藝州に遣し毛利氏の援を乞ふ小早川隆景内藤某に命し三百五十騎を率ひて時枝城に向はしむ統次之を察り十月二日夜急に兵を催し中島主殿助吉松兵部丞を先手として三百餘騎時枝城を襲ふ事不意に發し平太夫狼狽爲す所を知らず城を出て船に乘し防州に走る統次首級二百三十を獲たり義統其功を賞して宇佐郡司職を授く十五年二月三好秀次に從ひ薩州に入る十六年正月黒田勘解由次官孝高中津川築城の役を課す統次曰く薩州進撃の功に依り豊公朱印を賜ひて領地古例の如し故に我も一城の主たり他の課役に服す可らず十七年孝高其子長政をして來り攻めしめんとす統次乃ち一族中島彈正忠同主殿助同雅樂助同民部丞高家玄蕃允金光出羽守塚崎

(上 包)

中島玄佐

廣崎對馬守殿

増 雲

御 報 (廣崎衛盛藏)

其子を壹岐守秀祐大藏丞房直と云ふ房直永祿九年三月義鎮の命を承け赤尾式部少輔成恒越中守と共に麻生攝津守親政を撃て之を滅す相従ふ者中島彈正忠秀直同雅樂助惟真同主殿助俊直同八郎左衛門尉光季恒吉縫殿助爲治同三郎恒久川^{カハツラ}顏治兵衛尉重家荒川金吾武貞清原新兵衛尉^{ササヒ}眞衡尾藤尾張守成祐高家帶刀左衛門尉宗頼同善三郎爲清同玄蕃允光房同彌次郎吉秀金光出羽守光頼塚崎新五左衛門尉頼房原口藤藏成信林崎入道常津々見源五郎忠房同勘右衛門等三百五十餘騎なり功を以て伊豫守に任し世子義統の偏諱を賜ひ名を統次と改む天正七年正月統次其甥中島主殿助俊直に百騎を附し成恒越中守鎮家を援けて野仲の兵を禦かしむ俊直功を以て義統の偏諱を賜ひ統俊と改む時に隣邑時枝平太夫鎮繼佐野源右衛門尉親重等大友氏に叛き九月十日來り攻む統次兄弟出て庄川に戦ひ秀祐死す年四十法名を光照院吉譽助嚴行阿居士と云ふ十八日統次質を出して和す

就弓箭成立質人給候無二之契諾尤大慶候仍拘分之事不可有相違之條可被勵

に抵り大友義鎮に降り其軍役に従ふ永祿九年三月麻生の役を助け天正十年四月廿三四日田原近江入道に與力して時枝城を攻む其終焉詳ならず

中島氏 清原 姓

鎮守府將軍清原真人武則十世孫尾張國中島郡司左衛門尉宣長承久の役官軍に與せしに依り伊豆に配せらる後赦されて延應元年九月二十一日高家郷地頭職に補す壘を築きて居る中島城と稱し高家乙咩小長井三ヶ所を領す建長五年癸巳八月九日死す其七世孫を左衛門尉宗頼と云ふ建武三年三月足利尊氏に従ひ上洛す應安四年大内義弘に屬し官軍菊池武朝と戰ふて利あらず其子を玄蕃丞宗時と云ふ其七世孫玄佐秀俊夙に大内氏の末路を達觀し歎を大友氏に通し其麾下となる玄佐入道して増雲と號す弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に謁し近傍地頭を糾合して之に服事す

爲御被官向後別而可有馳走之由承候之條則令披露 御一字等申調進之候爰元於相應之儀者彌不可有無沙汰候就賀御知人之由候之間自今以後每事可申承之條本望候委細猶御使江申候恐々謹言

十月十五日

増 雲 花押

廣崎對馬守殿

御 報

紹忍と善からす天正十四年九月七日大友義統の爲めに焼打せらる公綱慶長四年乙亥三月十二日死す其子傳左衛門尉公保乙咩氏に復し乙咩八幡社職に任し右馬助と稱す子孫連綿たり

津々見氏

藤原姓

宇都宮大和守信房九世孫盛納次男城井掃部頭信

戸次男大膳正尙房玄孫左近大夫信嗣子津々見主膳能信高家郷に居る其子源五郎忠房弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其族勘右衛門と共に大友氏の軍役に從ふ

前二日時枝被懸合別而辛勞之由粉骨無比類候何様此節貞心之覺悟於向後不可有忘却候必一稜可賀之候恐々謹言

八月五日

紹忍 花押

津々見勘右衛門殿（北正樹藏）

十五年二月三好秀次に從ひ薩州に入る十七年三月一日黒田長政來て中島城を圍む忠房城主中島統次を援けて戰死す其子龜菊丸遺りて子孫連綿たり

照山氏

田部姓

其先廣山郷に住し廣山氏と曰ふ此地海に面し高山峻

嶺とし日光終日照射す故に一名照山と稱す因て氏とす後葛原郷四日市に移住し其地を照山山今寺と曰ふ天文中照山雅樂助と云ふ者あり弘治二年四月龍王城

寛治二戊辰年八月十五日

前大宮司宇佐公相 花押

公康十九世孫を右京進と云ふ其子兵部丞公綱葛原郷荒木村神功皇后三韓征伐時に木を伐らせ給ふ其所を荒木と名くに居る因て荒木氏と稱す弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に従ふ永祿四年五月隣邑上田高順吉村大膳互に境界を争ふて相闘ふ公綱及び其弟宮壽因て負傷す七月二十二日大友家豊前探題妙見嶽城主田原近江守親賢之を賞して下毛郡野仲郷田六町壹反五代昌貳町五代を賜ふ十一月公綱父子親賢旗下市丸奎助を助けて吉村大膳を滅す

吉村大膳成敗之儀市丸奎助へ申付候處各以調略輒誅伐候祝著候猶有永河内守可申候恐々謹言

十一月六日

親 賢 花押

乙咩右京進殿

乙咩兵部丞殿

公綱後三河守に任す九年三月麻生の役を助く然れとも公綱遂に田原近江入道

十五年正月義茂三好秀次に従ふて薩州に入る十七年三月黒田長政に降り城地を致す城址の墓碑に云く

天正十九年辛卯天

前勢州大守一翁宗仙禪定門

五月二十八日 櫛野一族中建之

茂晴慶長四年五月二十八日死す其墓碑に云く寶壽院殿櫛野大禪定門其菩提所久満山寶珠寺今も舊城の下に在り其子孫宇佐宮武官となり連綿たり

因に大友能直の父頼朝は清和天皇十代の後胤にして源姓なり能直の養父齋宮次官親能は鎌足十八代の後胤にして藤原姓なり因て大友氏の族或は源姓を稱し或は藤原姓を稱す

荒木氏 宇佐姓 楚狹津彦命三十四世孫公相次男公康葛原郷乙咩村に

住し乙咩八幡社司となる因て乙咩氏と稱す

讓與公康

乙咩八幡宮件之社頭者當家累代尊崇之靈場去永保三分與之候條專社務兄弟存不和之儀不可有因情之混亂旨今度新少納言公衡殿重而被爲及懇命新荒城名之地相添永讓與處實也存此旨自他之作法慎勿怠之爲後驗如件

廣崎兵庫介殿

(上包)

時 枝

廣崎兵庫介殿

鎮

繼

(廣崎衛盛藏)

櫛野氏

藤原姓

從五位下大友^{世二}

大炊助親秀六男大炊六郎肥前守親

重建長元年豐後速見郡木付

^{正徳二年八月十日杵築に改む}

其十三世孫紀伊守親實

男木付右近大夫親諸弟掃部茂晴天文中深見郷櫛野村地頭職となり櫛野彈正忠

と稱し城を築きて居る弘治二年四月茂晴龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役

に従ふ茂晴子なし義鎮三子主計頭義茂を請ひて嗣となす義茂伊勢守に任す天

正十年四月二十三日二十四日茂晴田原近江入道の與力となり時枝城を攻めて

功あり

今度宇佐社中之者共企一雅意候條閉目之儀申出候處田原近江入道以同伴別

而馳走之段感入候必其境取鎮一稜可賀之候恐々謹言

十二月十三日

義

統

花押

櫛野彈正忠殿

拜進 善光寺御寶前（善光寺藏）

（坪付略之）

十一年十月十一日廣山八幡宮司の請に應し家臣原田磯田等百騎を率ひて市川原に埋伏して田原紹忍か兵を支ふ而かも及はす十三年三月竊かに使を藝州に遣り毛利氏の援を請ひ以て中島城を抜かんとす統次之を察り十月二日夜遽かに來て城を圍む事不意に發し鎮繼爲す所を知らず城を出て船に乗り防州に奔り小早川隆景に依る十五年正月鎮繼三好秀次の軍目附黒田孝高に屬し嚮導して宇佐郡に入り舊領時枝城を以て其陣營となす是年七月孝高豊前六郡に封せらる鎮繼其臣となり築城郡別府城を守る十七年三月一日黒田長政の先驅となり中島城を攻めて之を亡はす慶長五年九月十三日孝高に従ひ大友義統と石垣原に戰ふ十月長政に従ふて筑前に遷り子孫世々仕へて平太夫と稱し其家今も福岡市に在りと云ふ

息女契約之儀承候斟酌任深重候舊友之事候是任御理候仍銀一兩給候大慶候猶溝口將監可申候恐々謹言

十月十二日

鎮 繼 花押

めに兵を率ひて来る右近鎮繼起て之を夾撃す統次一散に引返して中島城に歸る七年九月十日鎮繼親重と共に中島城を攻む統次和を請ふ質を徴して之を許す翌年再び攻めて克たす是より大友の與黨中島渡邊等と連年相戰ふ

龔奉寄附南閭浮提大日本國西海路豐前州宇佐郡高家郷於善光寺加燈料所田畠壹町之事坪付於別紙加袖判畢右以些少之事於御寶前宣願事偏雖似蘋畔溫藻之草獻用於國王微志所之豈納受乎

一願皇帝萬歲次天下泰平第三信心施主時枝武藏守仲原鎮繼兼願之旨依如來威力無難成就令滿足了彌々武運長久息災延命而良臣扶翼左右家門繁榮而賢聖補佐於前後發文武美名都鄙播揚義家之枝幡於鎮西退散西戎怨敵九國之波濤必定國家之安危明々德於天下匡古賢規矩親民止於至善一事而無不成殊者兒孫時々枝々葉々長生而綿々無盡期益於悻家成立者重疊所奉寄實也仍爲後代一筆如件

如來常住 無有變易

天正十

萬歲至祝々々

十二月廿四日

仲原鎮繼 花押

八十五

十五年二月親時三好秀次に随ひ薩州に入る十七年三月七日黒田長政に降り城地を致す子孫連綿たり

因に親時の家臣は吉村雅樂介、川島七郎右衛門山崎某、長廣惣左衛門室屋莊左衛門、立野左馬、樋田十左衛門、古門彌七郎、瀧尾五郎右衛門、田縁次郎、加治屋孫二郎、重來與三左衛門、徳光善兵衛、江城新兵衛、城下平兵衛、末並惣右衛門、岩田孫左衛門、中村甚五郎、寄村孫右衛門、柿木九右衛門、末廣惣兵衛、經清次左衛門、古殿與左衛門、大慈彌九郎兵衛、小慈彌惣兵衛、佐藤喜兵衛、熊久右衛門等なり

時枝氏

仲原姓

應永の初山城國八幡慶安寺の徒を宇佐彌勒寺に呼ひ

下し寺務役となす高家郷猿渡下村時枝に壘を築きて居る時枝氏を稱し左馬助惟光と云ふ猿渡上下兩村及び上毛郡鬼の木村を領す六年正月大友左京大夫氏鑑に従ひ岩石城を救ふて敗北す其五世孫を平太夫鎮繼と云ふ兵部少輔に任す天文十五年二月善光寺村、高村の内西原及び猿渡下村を合して時枝村と名く弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ然れとも鎮繼素より義鎮を喜はす且探題紹忍を憎み且中島赤尾か大友氏の寵を得て傍若無人なるを憤り佐野親重と謀り志を毛利氏に通し天正元年五月五日親重か赤尾光岡城を襲撃するに當り勢援を與へ布留右近に謀し合せ五十騎を率ひて放生堂に埋伏させ自ら百騎を率ひて絲口に陣し以て中島に備ふ統次果して赤尾を援んか爲

入道と稱す弘治二年四月親時龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ひ兵部丞に任す三年六月赤尾左衛門大夫賢種より山田安藝守陸介に宛たる軍忠狀宇都宮氏の族下毛郡山田安藝守野仲兵庫頭等毛利氏に内應す大友義鎮之を討す親時其役に從ふ

就今度山田以下之惡黨御退治爲無足に出陣被勵軍勞候之趣令披露候之條必別而可被成御感之由被仰出候誠面目之儀候恐々謹言

八月二十八日

鑑 續 白杵安房守

長 増 吉岡越前守

鑑 生 田北大和守

治 景 雄城若狹守

親 守 志賀安房守

萩原兵部丞殿（萩原勇平藏）

各花押

山城入道天正三年正月十四日死す其碑文左の如し

天正三年正月十四日

青霄院久嶽一雲居士

五世孫佐野小太郎師親。下野國佐野より。元文誤り天文中。下向豐前國宇佐郡。佐野村領掌。築城居焉。號土井城。とあり又師親四世孫を源右衛門尉親重となせり然れとも豐前古城記に。土井城佐野氏代々居城。應永中佐野助太郎親通在城云々とあり兩豐記に應安四年既に助太郎親通なる者あり大内義弘に屬し官軍と戦ふ事を記せり豈に天文に至て始めて此に來れるならんや宇佐郡記に親重が赤尾統秀を襲ふ一の理由として佐野源右衛門は其先宇佐氏にて親政生麻とは同苗の祖なり時枝平太夫も其先宇佐の寺務役にて是等は皆麻生に舊縁之者なれば親政一族の滅亡せし事を嘆きとあり則ち親重は宇佐姓にして麻生と同じく往古より此に住す東國の佐野とは全く其祖を異にすること明らかし永祿九年三月麻生の役起るや宇佐郡北部の地頭は悉く大友氏の催促に依り寄手に加はれり而るに獨り佐野時枝は疾と稱して與らず是其同姓若くは舊縁あるに因りて自ら避け大友氏亦之を強ひさりしなり因て今宇佐郡記の説に従ふ

萩原氏 大神姓 右京進大神朝臣房俊罪を獲て豊後國大分郡萩原村に

配せらる子孫相繼て居る因て氏とす世々大友氏に仕ふ應永中美濃守房圓に至て宇佐郡廣山郷宮熊敷田二村の地頭職に補し宮熊村に城を築きて居る美作守房氏を経て土佐守鎮房に至る其墓碑宮熊村塚本に在り左の如し

佛性院殿前土佐守鐵關宗無大居士

天文十一年六月十六日

其子山城守種親上敷田村に移る家を其子四郎兵衛親時に譲り自ら老して山城

虎壽丸か手足の爪を一日に一指宛抜かせて之を殺し其首を岡田原に梟す親重益々憤り野仲等に謀し合せ譜代郎從を催し城郭を修補し一族家臣奈良頼母介重尙有安兵部重根、築城傳治兵衛重通、園田外治郎孟貞、佐野清左衛門親宗、同太郎宗範、門柳七郎左衛門武重、野田刑部經方、梶谷金吾重堅、齋田治郎尙久、小犬丸彈平、高通、片峯高俊、船橋治郎宗濟を始め二百八十四人楯籠る此事豐府に聞へ九月六日義統自ら將として豐府を發す先鋒には吉弘統行、宗像鎮繼、旗下には大津留鎮益、田北統辰、臼杵統光五千餘騎を率て來り清水秣に陣し一手は野仲押へどして權現山に陣す親重自ら出て無二無三に戦ひ遂に寄手内尾帶刀清水城主の爲めに撃れて死し其弟清左衛門親宗其子源次郎親政を始め一族郎從大半戦死し城遂に陷る其屍を菩提所光明寺に葬る其法名に云く

佐野靈院殿存賀常席居士 親重

放光院殿玉岩宗金居士 親宗

爛亭院殿牛養宗春居士 親政

親政子右兵衛親孝世に存りて佐野村に住し子孫連綿たり

因に德光顯藏寫本佐野氏系譜に依れば佐野氏は藤原姓にして武藏守鎮守府將軍倭藤太秀郷十

築きて居る四年大内義弘に屬し官軍菊池武朝と戦ひて利あらず數傳して源右衛門尉親重に至る天文中豐前守護職大内義隆の爲めに規矩郡蒲生城を守る弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ然れとも親重常に義鎮の妄狀を疎み且同姓麻生親政の滅亡を悲しみ且隣邑中島赤尾か麻生討滅の武功に誇り權威に慕るを憤り時枝鎮繼萩原親時と共に大友氏に叛き毛利氏に屬せんとそ謀りける時に天正元年三月十七日赤尾鎮房病て死しければ親重此虛に乘し光岡城を襲はんとす親時曰く三年の喪に乘するは正兵の義にあらず親重聽かす時枝萩原に萬一の時の後詰を頼んといひて五月五日夜光岡城中佛事作善の時に乘し親重手勢三百騎を率ひて押寄す城將彌次郎統秀事の爲すへからざるを知りて自殺し城遂に陷る六年十一月大友氏日州耳川に大敗するに及んで親重鎮繼は益々叛意を固ふし七年九月十日中島伊豫守統次の居城を攻め平らきを取て還る八年再ひ之を攻めて勝たす十三年鎮繼統次の逆襲を受け敗れて防州に出奔す是に於て親重下毛郡野仲氏築城郡城井氏等と迥かに氣息を通し十四年八月其子源次郎と云ふか人質として妙見嶽城にあるを私に呼歸し其代りに甥の虎壽丸を遣しけるを探題親盛聞知し豐府に注進す紹忍大に怒り

楠ノ本の一族諸士は各舊地を領して馬飼料とそなしたりける種綱始めて此に住せしより凡そ九代二百三十四年にして亡ふ宇佐郡記に行種天正六年の頃立歸りしとかやとあれとも定かならず豊後日田郡朝日村大字才田に赤尾氏數戸あり是れ或は行種の子孫ならん其支族義種因種朝種の子孫にや後に大莊屋となり宇佐宮武官に列し赤尾氏を稱す文化中大莊屋赤尾三左衛門の養子に丹治と云ふかあり中津藩重歟の弊害を除かんか爲めに一揆の首魁となり磔刑に處せらる然りと雖も是より其弊害を減す是れ身を殺して仁を成す者に非ず耶其後孫官太夫明治二十年頃死して嗣なし

被官猿渡村西光寺城主田城

或田代

内記玄孝古川

此地は今知れず思ふに城主松原

右近孟行なり松原氏の先は關白頼通に出つその裔世々山城宇治小松原に居り古勢部氏を稱す藏人佐幸兼に至て永亨中大内氏に仕へ始めて松原氏を稱し周防山代の地三十五貫文を領す其子對馬守興詮の次男但馬守安定天文三年古川の地を賜ふ其子を右近孟行となす

佐野氏

宇佐姓

菟狹津彥命十三世孫麻生貞野の子佐野と云者高家卿

に居る其名のまゝに住む所をも佐野村と云其後孫助太郎親道應安中土井城を

す天正元年三月十七日鎮房病て死す五月五日統秀亡父の爲に臺上寺、長福寺、清來菴の僧を請し一族赤尾彌三郎行種、同刑部丞義種、同左衛門尉因種、同右京進朝種を始め松原孟行、今仁正實、知林忠次、榎木伴成、田城玄孝、川島滿信、吉田政春、城原貞常、了戒、征基、横光元邑、宮原精治、山脇矩利、相木兼教、落合伯房、合山重政、眞邊成秀、田中路鎮、坂本直清、岩田每重、瀧口廣高、熊川益宣、其外名主十一人相會し佛事を營めるに暗夜に乗して佐野源右衛門か軍勢三百騎押寄せ城壁近くなりて鯨波を揚げれば城中の周章名狀すへからす統秀出て戦ひ深手を負ひ城中指して引けるを佐野宗範透さす駄付上下と組合ける處に田城内膳合山掃部走り寄り佐野を掴んで放擲したり統秀間を得て城中に駄入り諸士に下知して櫓に火を掛け擾亂に紛れ諸方に落行かしめ自ら屠腹す相從ふて死する者七人其弟彌三郎行種は他日其志を達せんとして物具脱き捨て下郎に身を簍し豊後路指して落行たり一城其主を失ひたれば爲さん術なく川島七郎右衛門滿房、今仁主水正實は石部、岩崎、吉村を伴ひ萩原兵部丞の客分となり林三郎右衛門次位、吉田内記、照政は原田、磯田を伴ひ時枝平太夫に附屬し了戒内藏丞、征基、田中奎之助、政宣は渡邊和泉守の客分となり赤尾田城、合山、知林、宮原、城原、樋田、中園、石井、古寺、竹田、小布津部、

玄孝川島八左右衛門尉滿信、吉田木工丞政春、城原八郎貞常、了戒内藏丞征基、横光帶刀元邑、宮原右馬丞精治、山脇新兵衛尉矩利、相木兵庫兼教、落合源五郎伯房、合山掃部重政、眞邊新五左右衛門尉成秀、田中長次郎路鎮、坂本半藏直清、岩田宮内助每重、瀧口軍次郎廣高、熊川六郎左右衛門益宣、田城内膳、松本兵庫頭、桒木采女、同彈正、熊川市左衛門宮原彌六左衛門、築城八郎左衛門、林三右衛門、石田大膳、吉田内記、田中奎之丞、瀧中將監廣中等三百餘騎なり其感狀に云く

就今度麻生攝津守誅伐之儀、田原近江守以同陣從最前別而馳走之由、感悅候必追而一段可賀之候、恐惶謹言

永祿九年三月廿四日

義 鎮 花押

赤尾式部少輔殿

中島伊豫守殿 (西州軍記)

成恒越中守殿

斯くて賢種は中島成恒と共に豊府に至り、義鎮父子に謁す、義鎮之を賞して備前守に任し、偏諱を賜ひ、鎮房と改名し、嫡子彌次郎に義統の偏諱を賜ふて、統秀と稱

應安以來大内氏に屬し赤尾今仁大根川及ひ仲津郡大橋小部野村八町二反を領す
 至備中表吉川小早川取出候之條浦上宗景遂對陣防戰半之段注進及度々候於
 能島表茂藝州衆被向候間此節加勢無餘儀候如存知近年驅催中國衆兩川之渡
 海候折節宗景被顯貞心候村上掃部頭事茂同前之條彼兩人に可加力依覺悟赤
 間關口に急度一勢差出一行可申付催候乍御辛勞此砌別而可被勵馳走事可爲
 祝著候猶年寄共可申候恐々(以下損失)

(表書)

赤尾備後守殿

義 隆

(宇佐町時枝重明藏)

其子を左衛門大夫賢種と云ふ義隆の爲めに妙見嶽城を守る天文三年四月六日
 速見郡山香郷大牟禮山の役大友氏の兵と戰ひて功あり弘治二年四月龍王城に
 抵り大友義鎮に降り其命をうけて翌年六月二十一日下毛郡山田安藝守の居城
 を攻めて之を拔く式部少輔に任す永祿九年三月中島伊豫守及成恒越中守と共
 に麻生攝津守親政を撃て之を滅す相從ふ者赤尾刑部丞義種同左衛門尉因種同
 右京進朝種松原右近孟行^{タケユキ}今仁主水正實知林主計正忠次^{モシヅキ}校木源藏伴成田城内記

る高祖城と稱す後筑紫郡原田に遷り始めて原田氏と稱す壽永中原田直種平氏に屬し範賴と蘆屋浦に戰ふて敗れ嫡子賀摩丸ヨシキヨを質として降參す賀摩丸鎌倉に在て三浦義澄の女塔となり三浦氏を冒し幕府に仕へて任に京師に赴く承久三年後鳥羽上皇に屬し戰ひ敗れて豊前國仲津郡小部野村に潜匿し赤帝傳來の旗を宇佐八幡宮に納め赤帝の後孫と云ふ意義に因りて赤尾氏を稱す建武三年赤尾治郎左衛門尉種綱足利尊氏に従ひ上洛して戰功あり貞和六年四月二十一日高家郷吉田村地頭職に補す

下原田赤尾治郎左衛門種綱

豊前國宇佐郡吉田村高武藏守跡地頭職之事

右爲勳功之賞所宛行也

早守先例可令領掌之狀如件

貞和六年四月二十一日

將軍尊氏 花押

因て光岡城に居り吉田を改めて赤尾村と稱す其子兵庫助弘種其子修理亮國種其子三郎種之其子六郎種遠相繼ぎ其後彈正少弼種勝を経て備後守種重に至る

九月廿三日

義 鎮 花押

元重隱岐守殿（川谷本治藏）

一字之事統清進之候恐々謹言

十一月廿七日

義 統 花押

元重安藝守殿（同上）

天正六年三月日州高城の役鎮清子兵部丞鎮賴戰死す十一年の交時枝平太夫
屢々妙見嶽城を襲はんか爲め來て元重切寄を攻む統清邀へ撃て之を退く一族
掃部助左介戰死し郎從六郎次郎甚助源七郎等負傷す統清子三郎統信嗣き十五
年二月三好秀次に從ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り其地を致し市右
衛門と改稱す其弟久右衛門統政從兄鎮賴の祀を承け後に庄屋となり宇佐宮武
官に列し子孫連綿たり

因に元重村川谷新所藏系譜に源義家三男義國六世孫賴氏曾孫若狹守朝清近江國に住す應
安年中將軍義滿に從ふて豐前に下向し河谷四郎泰親の養子となり横山四ヶ名百町を知行
すとあれとも其事確ならず蓋し義滿の豐前に下向せし事なければなり

赤尾氏 大藏 姓 後漢靈帝の裔歸化して筑前國怡土郡に城を築きて居

作守親朝始めて麻生郷横山莊元重村に封せられ切寄に居る因て氏とす其四世孫大炊助繁親永正元年八月廿三日大友備前守親治に従ひ馬ヶ嶽城に戰死す其子隱岐守氏統嗣く其子次郎親氏天文十一年三月九日右衛門尉に任す大内氏の爲めに妙見嶽城を守る

妙見嶽登城之儀任貫備後守道敦申間今度御陣中在城之通道敦注進慥被知召候先以令下城自然於有雜說等者即時馳籠可抽忠節之由被仰出候愈馳走肝要に候恐々謹言

十二月廿二日

隆 仲 花押
重 矩 花押

元重次郎右衛門尉殿（元重修菴藏）

此書天文十四年なり隆仲は大内義隆の臣貫兵部丞なり重矩は同杉伯耆守にして貫備後守は同家臣妙見嶽城代なり

親氏二子あり長子を越中守次子を次郎右衛門と云ふ次郎右衛門天文十七年三月十一日隱岐守に任す弘治二年四月越中守龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に従ひ十月廿七日安藝守に任す

一字之事鎮清進之候恐々謹言

云ふ者あり其後孫を中村金右衛門となす

或は曰く山口氏の先は周防山口大内介持盛子筑前代官孫太郎入道南榮道頓の子景倫にて多々良姓なり文明二年此に來り山口氏と稱し其出る所を記すと

木内氏

平姓紀姓

葛原親王十三世孫千葉介常胤三男武石三郎胤成壽

永三年宇佐郡横山莊に來り紀姓武内宿禰の後裔紀の内教貫の女を娶り其名跡を嗣き紀の内胤成と稱す平判官康頼の課に因り丸尾城を築きて居る紀の内を改めて木の内氏と稱す遂に其地名をも木の内村と名く六世孫千葉之助晴胤足利尊氏に従ひ上洛す其孫を帶刀左衛門尉弘胤と云ふ弘胤六世孫帶刀左衛門尉胤貞に至り弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ天正十五年二月三好秀次に從ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り城地を致し上屋敷に移住す其子七右衛門貞春慶長八年三月木の内今成兩村の庄屋となり宇佐宮武官に列し子孫連綿たり

被官武石末二氏武石は胤成次男次左衛門尉胤卓より出て末は胤成五男五郎

丸博胤より出つ

元重氏

源姓

從四位下大友修理大夫親世五男西五郎親國三男河谷美

龍室安禪師を請して補陀落山清水寺を曹洞宗となす嘉吉中内尾新三郎公高に至り始めて麻生氏に屬す長亨中弟法師丸と云ふ者あり

奉寄

在豊前國宇佐郡向野郷宇奈瀬村之内菊丸散在之田地卅代あかはけ畠地卅代同所

右件田畠者内尾弟法師丸雖相傳當知行無相違地也然に八幡宇佐若宮殿爲御馬所秣免奉寄進所也彼志趣者且爲武運長久且爲二世願望成就如此申定之上者至于末代爲御神領我々子孫祈禱之段奉憑也仍奉寄進狀如件

長亨元年丁未九月廿日

内尾

弟法師丸 花押

御馬所別當殿 (南宇佐友岡榮太郎藏)

天文中掃部助久重及び内尾孫三郎と云ふ者あり其子を治部丞と云ふ其子清左衛門天正五年丁丑夏五月一夜大友義鎮天主を信して神祠佛堂を焼くと見て夢は覺めぬ清水寺果して其兵火に罹ると云ふ其子帶刀十四年九月大友義統の兵に加はり佐野親重を撃て之を殺す帶刀の墓下毛郡深水村奥畑に在り
中村氏はもと栗原氏なり麻生郷中村に居る因て氏とす應安中中村十郎房信と

斯て岩田左近、松原掃部助、千原軍司を始め一族十八人列座して自殺す、殘兵城に火を掛落失たり、萬里三郎右衛門は乙丸を守護し、乳母諸共筑前路を指して落ちける處を寄手の軍兵捕へて乙丸を眞ヶ江六郎に附托す、其他の捕虜瀬戸新助は都留右近に、小石川軍次郎は佐田鎮綱に、千原源左右衛門は渡邊光政に附托す、西州軍一説に次男麻生四郎統宣は筑後柳川に落行知音の家に身を隠し、事靜りて後舊里に歸り、麻生左馬助公明と稱し、縁家に忍ひ居りしか大友の代官某に毒殺せられ、三男乙丸も後に害せられしと云ふ、宇佐宮武官に麻生氏あり、是れ其名跡を襲きたる人あるならむ、麻生家舊記に云く、麻生、山口、菖蒲、萬里、岩田、徳丸、松原、大迫即禮、永田、江河、金丸、得光即内尾、千原、黒村、中村を以て十五名主とす、麻生常陸介と云ふ者、嘉吉年中高尾山に城を築き住せしより、自然と名主の棟梁と成て十四人は幕下に屬す、古我城中野、船田、仙福、瀬戸、床並、蘆原、梅目字一滴は元來麻生家臣なり

被官法蘭城主麻生常陸介家光、清水城主内尾掃部久重、中村金右衛門、今成玄蕃、山口彈正等なり

内尾氏は宇佐姓にして久しく麻生郷に居る、應永十一年内尾某、豊後泉福五世

二月赤尾式部少輔賢種、中島伊豫守房直及び下毛郡成恒、越中守矩種に命じて來り撃たしむ。惣勢八百五十餘騎渡邊和泉守光政、元重、安藝守統清、照山雅樂助、廣崎兵庫助、荒木三河守、今仁伊豆守、城太郎左衛門、蘆荻越前守、田中長次郎、吉松、西條溝口、御堂、辛島、皆木、皆木は水無木にて上田村の地名なり、市丸、弘山等、之を助け、大友の加勢千五百餘騎、赤尾は元重に陣し、中島は小倉原に陣し、成恒は毘沙門堂に陣す。親賢妙見嶽城に在て遙に指揮し、三方より押寄す。城兵三百餘騎必死に防戦し、毎日二合三合十餘日に及び互に死傷あり。城兵残り少くなりぬれば、三月二十日親政夫人安心院氏公正女及び女孺六人も陣頭に出て戦ふ。寄手も颯と引ければ、夫人今は是迄なりと城中に駆入り、親政に向ひ早々腹召れよ、死出の先、駆仕ん、逆守刀を喉に突立、相果たり。親政、黒村喜多右衛門政勝を呼ひ、我、正統を世に残し、度何卒末子乙丸を守護し、何地にも身を隠し、時節を待て、我、本懷を達すへしとありければ、政勝領して、安心院氏の妹と共に城より出にけり。萬里三郎右衛門か、次男五歳なるを乳母に渡して、敵を欺きけるとかや。親政今は心安しとて、辭世の詩を賦して、萬里に渡す曰く

青山雲霧日初新　夜壑時移暗斷神　百歲光陰皆夢境　風前驚見落花春

司、宇目平太夫、酬田禮權内、瀬戸新助等を集め評議しけるに左近曰く大友に諫言して聞かされは手切せん討手來らは城郭を堅め毛利の後詰を待たんと衆之に同意す親政乃ち書を義鎮に贈る其文に云く

豊前國住人麻生攝津守親政謹而言

貴家益光政徳弘志士之氣内外無偏私之煩有司之刑賞皆良實而爲豊筑肥向七州之主武命之幸加之哉蓋探題親賢入道者非節義之臣暴逆之佞奸也親之信之則大友之臣可計日而待紹忍暴逆其一捨家令古式墜邪義異端其二無車功而誇權威最負多無決斷其三無禮義而貪於貧民讒友惑主其四不伐大敵而伐家人巧辨舌而飭外其五押領寺務神領施如慮無逼因果居士之邪徒遊宴濫妨之族不舉遑退奸徒則大友之幸甚國家之幸甚再拜々々

永祿八年八月 日

麻生親政判

大友宗麟公陣下

義鎮聽かす反て五靈判官國賀を遣し慰喻す十五名の名主我要害を知らるゝ事を恐れて國賀を城内に入れすして之を殺す親政岩田源八郎千原平藏を藝州に遣し援を毛利氏に請んとするに大友方の中島等海口を扼して通せず義鎮翌年

生郷には内尾新三郎公高を始め岩田仙福、床並、芝原、瀬戸、山口、山村、徳丸、萬里、菖蒲、松原、古我城、一滴、千原、等十五人の名主ありしか、悉く服従して其兵仗に與る、永正中宮内少輔興家と云ふ者あり、大内義興に屬す其子彈正忠大、永中大友義鑑の爲めに田河郡名木野城を守る其子を攝津守親政となす弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に従ひ嫡子統重出て豊府に仕ふ、永祿八年七月統重豊府に在て田原親賢か子新三郎の奸計に陥り憤激して之を刺し且自殺す其大友家老臣吉弘嘉兵衛に贈れる遺書に云く

田原新三郎從去春同勤仕候處彼者傍輩之非内戚外戚之沙汰君前足音高く悶奉行人物之取次人之太刀を拔見不聽千萬也去頃加異見之處無誘引却て昨日之振舞急激不安如斯仕者也宜預御披露候恐惶謹言

七月 日

麻生七郎統重 花押

吉弘嘉兵衛殿

親政變を聞き常に親賢の奸佞を憎み且義鎮の近狀を疎んするより大友の麾下を離れて毛利氏に屬せんと欲し家臣岩田左近、山口彈正、菖蒲司馬助、内尾式部丞、中野内藏、芝原新兵衛、古我城兵部少輔、松原掃部助、黒村右膳、同喜多右衛門、千原軍

其子を主水助と云ふ弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に従ふ
 天正十年四月廿三日田原紹忍に與力して時枝城を攻む十五年三好秀次に従
 ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り其地を致す子孫庄屋となり宇佐宮武
 官に列し相良、川部の二家連綿たり

麻生氏 宇佐姓

菟狹津彦命七世孫を豐玉と云ふ其子小船其子安山其
 子宣坂其子長野其子古邊を経て武雄に至り白鳳七年宇佐公姓を賜ひ正五位下
 に叙す其子貞野麻生郷に居る因て氏とす郷中今も宣坂貞野等の地名あり貞野
 曾孫池守始めて宇佐八幡大宮司に任す其壽三百歲其子孫公家なれはとて典侍
 四人外に書司、藏司、尙兵、水司、典膳、酒司、女孺六人等を設け管鑑出納の事を掌る建
 武中玄蕃頭と云ふ者あり官軍菊池武重に屬し貞和中田河郡戸代山城を守る應
 安三年三月賊將畠山義深の攻むる所となりて城陷り肥後に奔り菊池氏に依る
 七年三月官賊の和成る乃ち麻生彌六左衛門尉大内義弘の旗下となり内尾氏の
 高山城を取て居る此城は建武中内尾三郎伊家の築く所なり永享三年正月十一
 日麻生權之進、同孫七郎馬ヶ嶽城主新田義高に屬し菊池武忠と瀬社川に戦ひ孫
 七郎負傷して死す嘉吉二年其子常陸介守實城郭を改造し勢力大に張る元來麻

（上包紙）

前大宮司宮成殿

相良中務大丞

武任

御報

天文六年正月六日武任職を繼ぎ從五位下に叙す十年七月廿二日遠江守に任す
十三年五月致仕十七年八月再仕二十年八月十六日陶隆房の叛逆を企るに當り
武任出雲に出奔す二十一年四月歸國大内義長に仕ふ八月十日再び出奔肥後人
吉に至り同族に依らんとせしを筑前太宰少貳杉興連抑留す乃ち武任自殺す年
五十四其子隱岐守川部村に居る

上納申料足之事

合捌百文者清目足單也

右爲宇佐宮心經會御遣方對川邊隱岐守所令勘渡如件

天文廿二

渡邊民部丞

正月十二日

資花押

廣崎掃部丞殿（廣崎衛盛藏）

大友氏鑑に與し六年大内盛見と岩石城に戰ふて敗北す其子を刑部左衛門尉諸方と云ふ其子太郎晴房江島村眞ヶ江を領す因て眞ヶ江氏と稱す其後孫眞加江六郎弘治二年大友義鎮に降り其軍役に從ふ永祿四年七月此城兵燹に罹る九年六郎麻生の捕虜攝津守親政三男乙丸を監護す其終焉詳ならず宇佐宮武官に菱形氏あり是れ其後裔なる歟

相良氏

藤原姓

大職冠鎌足孫左大臣武智磨の裔左京大夫周賴遠江國榛原郡相良莊を領す因て氏とす其五世孫三郎長賴畠山莊司重忠追討の功に依り遠州領知之外播磨國飾磨郡及び豊前國酒井莊上毛下毛二郡の地頭職を賞賜せらる建久九年長賴肥後國球磨郡人吉莊地頭職となり其族越後及帶力二人酒井莊川部村に居る或は相良氏と稱し或は川部氏と稱す文明中相良遠江守正任豊前守護職大内氏に仕へて奉行職たり其子の中務大丞武任と云ふ

寔青陽御吉兆無申計○○尙以不可有盡期候抑御卷數頂戴目出候事候期後喜可申候恐惶謹言

正月二十一日

宮成殿

花

押

々謹言

十一月十三日

宗

麟

花押

橋津掃部助殿

天正六年十一月耳川の役に従ふ十年時枝鎮繼等と共に大友氏に叛く十一年二月田原紹忍來り攻む因て大雄寺兵火に罹る

前朝於平田表宇佐郡橋津衆懸合終日防戰辛勞之由候殊僕從兩人被疵之段感入候必追而一段可賀之之趣猶田原近江入道可申候恐々謹言

二月八日

義

統

花押

渡邊加賀守殿（渡邊完藏）

十五年二月其子掃部助正氏三好秀次に従ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り城地を致す文祿元年大友義統に屬して朝鮮に出陣す其子喜左衛門正永大莊屋となり慶安四年辛卯九月十七日死す法名轉室道佐居士子孫本多氏を稱し正辰まで世々大莊屋を以て宇佐宮武官に列す

眞^シ加^カ江^ヘ氏

宇佐姓

文治中宇佐大宮司公房鎌倉右大將の課に依り向

野郷立山城を築き世々其居城とす應永中菱形刑部少輔宇佐長量此に據る五年

彌富右衛門尉殿

深見中務丞殿

惠良美濃守殿

齋藤新四郎殿

橋津掃部助殿

時枝兵輔少輔殿

飯田但馬守殿

安心院中務大輔殿

御報

鑑興は大友老臣吉岡下總守入道宗歡にして親宏は大友一族國東郡安岐城主
田原常陸介入道宗龜なり

其子次郎左衛門尉正武弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り掃部助に任
す永祿十二年夏より冬に至て毛利氏の兵と豊筑の野に戦ふ

就吉川小早川退散示給り祝著候然者至其表在陣寒中辛勞察存候彌無油斷馳
走專要候仍見事候餉濟々到來候毎々懇之儀喜悅候猶田北兵庫入道可申候恐

子六郎二郎延徳中宇佐那段錢奉行たり其子を橋津掃部助と云ふ天文四年乙未五月八日死す法名壽山元高居士其子掃部助嗣く二十年九月大内義隆滅亡の後大友氏に屬す

去二二至○○○守宅所被取懸被打崩別而御粉骨之次第銘々遂披露候之處御祝著之段對親宏以御書被仰遣候條尤珍重候可被勵忠貞之事肝要之由從私能々相心得可申旨猶重疊可申承候條右略候恐々謹言

九月五日

鑑

興 花押

佐田彈正忠殿

内尾治部丞殿

惠良小次郎殿

中山左馬助殿

中山彈正忠殿

矢部宮内丞殿

赤尾左衛門大夫殿

副越中守殿

其方事時枝え申合候通得其意候何分にも彌同意可爲尤候此方無疎略候間可
心安候恐々謹言

正月二十七日

黒田官兵衛尉

孝 高 花押

吉村式部丞殿（廣崎衛盛藏）

然れとも其所領遂に孝高の沒收する所となる子孫宇佐宮武官となり連綿たり
都留氏 藤原姓 其先藤原兼鎮甲斐國司となり都留郡に居る因て氏と

す其後裔玄蕃榮鎮に至て封戸郷高森村に來り居る其家世々宇佐宮御馬所副職
たり弘治二年都留右近と云ふ者龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ後
壹岐守に任し壹岐入道と云ふ其子右近丞及び喜三郎田原紹忍の家臣となる子
孫莊屋となり宇佐宮武官に列し連綿たり

橋津氏 藤原姓 本多氏世々封戸郷橋津村に居る因て橋津氏と稱す應

永中掃部助實度と云ふ者大内氏に屬す其法名を大雄寺殿橋越元津居士と云ふ
其子掃部助正公入道して久菴居士と號す阿聖山大雄寺を創建す其子本多出羽
守正道永享二年庚戌八月十八日江島若宮八幡神殿を造進す其棟札現に存す其

統次戰功を経て但馬守に任す

花
押
統義

坪
付

朝來田

一所參町

吉村掃部跡

以
上

天正八年九月二十日

吉村但馬守殿 (同上)

天正十四年薩人南豐を侵し大友氏の運命岌々たり然れとも統次志を變せず妙見探題親盛に屬す

書狀具加披見候此表之儀聊無易事候薩州之者共南部表へ雖相屯候不可有指儀候可心安候仍肴一折令祝著候恐々謹言

十一月十八日

親
盛
花押

吉村但馬守殿 (同上)

其子式部丞天正十六年時枝平太夫に結ひ黒田氏に依り其領地を全ふせんとす

殿允次男與七郎事從其場逐電之由候既重科仁候條國中於徘徊者誅伐段對實
信被仰付候萬一彼親類中於有拘置仁者可爲同罪候由被仰出候可被得其
心旨候恐々謹言

十一月三十日

鑑 實 花押

重 輔 花押

佐田彈正忠殿 (宮成男爵藏杉子爵轉藏)

重輔は大内氏の臣杉伯耆守重輔なり天文二十年六月十日豊前守護代となり
弘治元年三月四日陶晴賢の兵に殺さる鑑實は大友氏の臣一萬田兵部少輔鑑
實にして内藤武時は大内氏の臣なり

實信子を彌六左衛門哉勝と云ふ弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其
軍役に從ひ大膳亮に任す永祿四年五月隣邑上田高順と境界を争ひ十一月田原
親賢の滅する所となる其子市次郎後來再ひ大友氏に屬す
一字之事統次遣之候恐々謹言

正月二十日

義 統 花押

吉村市次郎殿 (宮成男爵藏)

追而書略す有永河内守は大友家臣にして田原近江入道に屬せし人なり

天正十六年戊子七月二十五日死す法名を吉建徳院殿眞覺宗機禪定門と云ふ其子實古世職を襲き子孫連綿たり

是恒氏

姓 不 知

辛島郷畠田村に居る天文中は恒備前守國賀と云ふ者

あり弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に従ふ天正六年十一月十二日耳川の役島津の兵伊集院平太夫と鬪戦し流失に當りて死す其子外記義道八歳にして家を嗣き十七年三月黒田長政に降り領地を致す寛永十五年五月死す年五十九畠田村法船菴に葬る法名覺相院義山道猷居士其子文二郎後嘉右衛門道隆宇佐宮武官に列す正保三丙戌年畠田村庄屋となり子孫連綿たり

吉村氏

宇 佐 姓

應永中吉村伊惣左衛門尉弘義と云ふ者葛原郷今井村

に壘を築きて居る因て今井氏とも云ふ文明中吉村左馬助貞種大内氏に屬し其後孫左馬允實信大友氏に屬す

内藤左馬助武時被官城縫殿允父子三人事御家人吉村左馬允實信父内藏丞無名に被生害候重科仁候條今度實信令誅伐之由言上候被成御心得候然處に縫

云ふ

宇佐宮神馬之事任御注文令引進候可執進社家請取狀仍執達如件

元德二年四月四日

武藏守花押

太宰少貳殿

御中

應安四年左衛門佐道實

系圖には實内とあり

と云ふ者あり大内義弘に屬して菊池武朝と

戦ふ明德中壘を鷹居山に築き上田城と稱す今も其址存す凡そ壹町八反貳拾歩の地なり應永三十一年甲辰正月六日死す法名大雄院殿貫道宗機大居士。天文中式部左衛門尉氏實と云ふ者あり清永氏を稱す其孫上田因幡守實俊弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ後入道して高順と號す

上田高順と吉村大膳と下地論之儀に付而慮外出候處然者御息兄弟被疵之由候御高名と者乍申口惜敷次第候先々御左右可承人を進候無申迄候得共堅固に養生肝要候恐々謹言

永祿四年五月二十五日

有永河内守

資辰花押

門を撃つ其感狀に云く

猛勢懸合則切崩數十人討捕高名之次第無比類候然者爲其賞至寄合中百町分之事預遣候知行之所委曲田原近江入道可申候恐々謹言

九月五日

義統 花押

四日市切寄

渡邊寄合中

十五年統忠三好秀次に従ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り其地を致す元和六年八月二十六日死す子孫世々醫を業とす專要慶長九年十一月二十五日寂す其子統述入道して正明と號し實相山眞勝寺を創建す元和五年八月十九日寂す今の東本願寺別院是なり正明長子正願眞勝寺に住持し次子了無還俗して清左衛門と稱す其子孫連綿たり

上田氏

紀姓

中納言紀長谷雄天慶九年豐後國々東郡田原郷に配せら

る其孫季兼天喜四年宇佐宮神領田原別府五十九町餘の地頭職となる數傳して則秀に至り文永二年二月宇佐宮御馬所別當職に補し宇佐郡辛島葛原兩郷の内上田名を領す因て氏とす子孫其職を世々にす其七世孫を宮内左衛門尉實世と

或分捕高名或被疵人數著到銘々加披見訖

頸一名字不知 渡邊石見守討之

頸一同 照山雅樂助討之

頸一同 渡邊壹岐守討之

頸一同 渡邊新右衛門尉討之

頸一同 渡邊三郎右衛門尉討之

被疵衆

相良主水助 矢疵

櫛野彈正忠郎從

忠右衛門 矢疵

市丸式部少輔郎從

助 七 矢疵

蘆刈 玄允 矢疵

以上

十四年八月三日又時枝城餘類と戦ひ九月五日義統の命に依り隣邑佐野源右衛門

の子藏人統綱入道して專要と號す其子縫殿助統述後加賀守に任す其族市右衛門尉壹岐守、新左衛門尉、三郎右衛門尉、兵部丞、土佐守を總稱して四日市切寄衆又は渡邊寄合中と云ふ

今度寄合中最前以來田原近江入道任裁判馳走感入遣判形候處重々不足分を訴訟之趣得貴意候紹忍此節封裏到來之坪付之別可分別候雖然向後入組候儀候者其刻可申理之趣猶紹忍可申候恐々謹言

十二月廿六日

義 統 花押

渡邊石見守とのへ

渡邊壹岐守とのへ

渡邊三郎右衛門尉とのへ

渡邊兵部丞とのへ

渡邊市右衛門尉とのへ

渡邊縫殿助とのへ

十年四月二十三日近江入道に與力して隣邑時枝城を攻む其軍忠狀に云く

花 押 義統

天正十年卯月二十三日同二十四日於時枝表田原近江入道紹忍與力家中之人

廣崎彈正忠殿

廣崎式部丞殿

其外若中

十四年六月時枝殘黨來襲す切寄衆撃て之を退く十五年二月宗善三好秀次に從ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り其地を致す其子里次宇佐宮武官となり子孫連綿たり

渡邊氏

源 姓

嵯峨天皇第十八皇子左大臣從一位源融曾孫綱攝津國渡邊に居る因て氏とす養老五年死す其曾孫を松浦判官久と云ふ其長男丹後少將披肥前國松浦郡大川野峰城主となり三男丹後權守持同郡波多郷鬼子嶽城主となる因て波多氏と稱す持十世孫筑後守光天文二十二年鬼子嶽城を去て宇佐郡葛原郷四日市に來り大友義鎮に依る舊姓に復して渡邊を稱す永祿九年五月二十六日死す法名を捐館前筑州大守孝菴存忠禪定門と云ふ其子を兵庫頭光述和泉守光政となす弘治二年四月光政龍王城に抵り義鎮に謁し爾後其軍役に從ひ永祿九年三月麻生の役を助く光述天正二年閏十一月九日死す法名を法岸淨運居士と云ふ光政の子を雅樂助統忠と云ふ七年十二月十六日石見守に任す光述

可爲對馬守之狀如件

弘治元年十二月二十六日

廣崎掃部丞殿

家 丈 花押

二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降る十月中島玄佐に依て大友家被官となり其軍役に從ひ對馬入道と稱す永祿四年八月門司の役に戰死す其子兵庫助種方嗣き九年麻生の役を助け後兵庫入道宗善と稱す天正中田原紹忍に屬す其族大藏丞基次三河守某雅樂允某忠次郎彈正忠某式部丞某中務丞某次郎左衛門尉種勝を總稱して得弘切寄中又は廣崎寄合中と云ふ

就里鄉再亂之儀到中山左近助切寄罷登普請以下別而馳走之由令祝著候愈此節於勵辛勞者必靜謐之刻可顯其志候恐々謹言

天正九年九月九日

紹 忍 花押

廣崎 中務丞殿

廣崎兵庫入道殿

神樂表動自最前別而馳走之由候感悅候猶中山左近助可申候恐々謹言

天正十年十月二十六日

紹 忍 花押

廣崎兵庫入道殿

云ふ者あり拜田村を領す其子監物弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降る
 其子は大膳と云ふ大膳閣村壬富賀深今身監物丞の女を娶り九千代を生む大膳後
 四郎右衛門と改稱し天正二年死す其室壬富賀氏閣村に歸り九千代を壬富賀家
 の庶子となす田原紹忍九千代を猶子として田原氏を稱せしめ己か被官とす其
 子孫今も閣村に存して田原氏を稱す監物丞の子作左衛門其子彌七後作右衛門
 に至り享保中宇佐宮代官職宮田半左右衛門と云ふ者武官を望み拜田村莊屋生
 山權兵衛安倍宗勝を介して大藺の苗字を請ふ彌七之を諾す是より半左右衛門
 大藺氏を冒し宇佐宮武官となり四日市渡邊完所藏安倍氏舊記中生山權兵衛久
 條拜田村四名之内大藺家斷絶の記事に依る
 しく斷絶せる大藺の名跡復た興る

因に拜田村に四名あり大藺監物、拜田勲實、蟲織部（並に安倍姓渡瀬筑後守（大神姓）是なり

廣崎氏 平 姓

其先平直方に出つ維方及び北條時家同時氏を経て岡崎
 惡四郎吉實に至り辛島葛原兩郷の内得弘名を領し來て此地に居る（一名中原村）
 其後孫盛實別に家を起し得弘氏を稱せしか文明中宗家岡崎兵庫助死して嗣な
 し盛實因て兩家を併せて弘崎氏と稱し後廣崎に改む其孫掃部丞久次大内氏の
 幕下に屬し對馬守に任す

國清寺は大内盛見の法名なり其法名は國清寺殿大先德雄禪定門と云ふ兵庫助は大内義興老臣杉興重にして次郎右衛門等四人は金屋村南氏なり

後近江守に任す享祿四年四月九日死す其位牌に云く捐館前江州大守天心知祐禪定門神儀其子宮内丞嗣き天文二十年大内氏亡ふるに及んで大友氏の幕下となり後伊勢守に任す其子山城守嗣く天正六年十月日州耳川の役に戦死す長興寺梵鐘銘の序に云く

(前略)應永中故領主矢部高朝公敬慕師道而寄附百貫田山林等而爲菩提道場其五世之孫城州大守天正戊寅冬戰死于日州云々享保八年歲次癸卯二月十三日前龍朔第一座現住長興嗣法沙門寶室紹祚謹書

其子三郎嗣く十七年三月黒田長政に降り城地を致す文祿元年六月十二日死す位牌に云く歸真一湖慶菴居士覺位南宇佐村に矢部氏を稱し宇佐宮武官となりし人あり是れ其後裔なる歟

大蘭氏 姓不知

向野郷拜田村に居る妙見嶽城を據守し或は妙見氏と稱す佐田村大字矢崎飯田彦六所藏天文中字佐郡小應安中妙見十郎重基と云ふ者あり大内義弘に屬して菊池武朝と戦ふ其子伊勢守昌親應永六年大友氏鑑に與し大内盛見と戦ふて敗北す七年妙見嶽城を大内氏に致す天文中大蘭四郎と

はれて香下氏を冒し子孫連綿たり

因に享保中宇佐村庄屋宮田武左右衛門宇佐宮武官を望み香下氏の名字を貰受け香下武左右衛門と稱し宇佐宮武官となりしとそ(拜田安倍氏舊記錄)又野本氏の組織部助朝昌劍道を以て信州松本に於て小笠原信濃守秀政に仕へ其子木工兵衛朝知小笠原信濃守長次に従ふて中津に來り其曾孫貞右衛門朝英香下村白岩に隠れて醫となり可足と號す朝憲は其三男なり(野本氏家譜)

矢部氏 大神姓 大神比義の裔助雄貞觀中宇佐若宮神主となる其子孫

向野郷矢部莊に分居す因て氏とす應永中近江守高朝城を築きて龍ヶ鼻城と號し大内氏に屬す文明二年六月十九日死す矢部村天柱山長興寺位牌に云く前江州大守日的宗融禪定門神儀文明二庚寅六月十九日高朝其子新左衛門近江守高房嗣く延徳中宇佐郡段錢奉行たり其位牌に云く前江州大守刺史龜仙壽暢大居士考有縁無縁其子五郎左衛門尉嗣く

宇佐宮寺鑄物師大工職事

任去應永三十三年三月二十七日國清寺殿様御袖判奉書之旨次郎右衛門與三左衛門五郎左衛門助左衛門相續不可有相違之旨對彼等可被申觸之狀如件

大永二年四月二十日

兵 庫 助 花押

矢部五郎左衛門尉殿 (金屋村新右衛門子葛原村福本新三郎藏)

年兵部丞と改め探題近江入道及び其養子田原與兵衛尉親盛義鎮次男後細川氏の臣となに馳走す

・田原近江入道至妙見岳在城之儀申付之處從最前以同城別而辛勞之由悦喜候
每事紹忍被得指南彌可勵馳走事肝要候猶田原新九郎可申候恐々謹言

正月二十日

義統花押

香志田兵部丞殿

新九郎は義統弟親家なり天正八年國東郡安岐城主田原右馬頭親貫叛く二月二十四日義統討して之を滅し弟親家をして其家を繼かしむ親家因て田原氏を冒す十三年親家門司城に移り門司勘解由允と稱す故に此書は天正九年より十三年までの間の物とす

十五年二月兵部丞三好秀次に従ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り城地を致す其墓碑文左の如し

香志田兵部丞塚

慶長中細川忠興の時其子傳兵衛母は是恒備前守國賀女大莊屋となり香志田を香下に改む天明中順左衛門まで七代勤續し文化中其孫信左衛門に至り香下村莊屋となる信左衛門實は野本嵐岳齋源朝憲の次男なり順左衛門の子喜三左衛門に養

小山氏は下野國都賀郡小山住人小山左衛門尉朝政の裔なり其十一世孫石見守義春紀伊國伊都郡津田に住す其子義時伊都郡三百町を領し了戒大和守と稱す義時五世孫了戒左衛門義行應永中宇佐郡副村に來て其地を領す其孫了戒主馬義村に至り寛正二年大友氏麾下高松五郎に攻められ豊後玖珠郡柳市村に遁れ其地を領して了戒村と改む義村孫了戒兵衛義貞永正三年再び副村に來り農に歸す其子義宗天文の初副越中守の臣となり小山大和守と稱す其孫義盛慶長中細川氏の鍛冶職となり百八十石を領す其子義次再び農に歸し其九世孫四郎右衛門吉房に至り庄屋となり副氏と稱し子孫連綿たり

香志田氏源

姓

從五位下大友

代十八

備前守親治五男田原治部少輔親

種子飛彈守種重天文二十年深見郷香志田村に封せらる因て氏とす大内氏の代將城井右馬允房統を逐て妙見嶽城に據る其子を出雲守と云ふ弘治二年四月大友義鎮豊前を徇ふ出雲守之に降る義鎮其老臣田原近江守親賢を妙見嶽城に居き豊前の探題たらしむ出雲守之に屬し大友家の軍役に從ふ既にして家を其子掃部助に譲り出雲入道と稱す天正七年十一月三日近江入道親賢の催促に應し安心院深見及臼杵等と下毛郡津民莊長岩城主野仲兵庫頭重兼を撃つ掃部助是

川越中守忠利の臣となり築城郡別府村越路村の内土毛三百石を賜ふ其子武員其子宗家相繼ぎ寛永九年忠利に従ひ肥後に遷り子孫世々仕へ其家今熊本市新屋敷町に在り鎮綱弟内記光綱再叔父泰綱の家を繼ぐ天正六年十一月十二日日州耳川の役兄鎮綱に代りて戦死す年二十五法名徳相院華運昌榮居士其子光友宇佐宮武官となり其子友久内川野村莊屋となる友久八世孫を勤王の志士内記兵衛秀となす

副氏 藤原姓

天文の初但馬國出石城主越中守某豊前に來り宇佐郡黒水に居り大友氏に依る後副村に遷り城を築きて居る因て副氏を稱す此城院内川荒瀬の渡に臨み副谷を一目に瞰下し背後に中山谷を負ひ要害の地なり其子を但馬守と云ふ弘治二年四月二十八日龍王城に抵り大友義鎮に謁し八月二日死す城址に其墓碑あり碑文左の如し

弘治二年八月二日亡

前但州大守副但馬守

村 中 建 之

副氏の被官ふ大副城主佐藤氏下副城主小山氏あり

因幡守朝景大永五年十一月十七日祖父泰景に承けて相續す天文十年十月四日大友義鑑豊前に入り速見郡衆松尾大藏丞言秀三浦太郎武清等をして來り攻めしむ

今度豊前國發向に付自最前以出陣所々手仕軍勢殊去十月四日佐田大膳亮要害とりくすし候刻衣疵よし忠義感悅候かならず追而一段可賀也穴賢

十二月十一日

よし 鑑花押

(速見郡南畑村三浦魯一藏)

二十一年六月五日朝景子彈正忠隆居大内義長の證判に因り地頭職を相續し且別に宇佐郡上津布佐百石足三隅又松丸先知行を賜ふ弘治二年四月二十八日龍王城に抵り義鎮に降り爾後其軍役に從ひ薩摩守に任す永祿八年十一月三日宗麟より豊筑の地五拾町分を賞賜せらる元龜三年閏正月其子彈正忠鎮綱家を承く天正六年三月義鎮の命に依り日向國土持親政を撃て功あり其子次郎統綱十五年三月三好秀次に從ひ薩州に入る是年七月五日豊公豊前西六郡を黒田勘解由次官孝高に東二郡を毛利壹岐守勝信に賜ひ鎮綱父子領邑を失ふ因て鎮綱は三郎右衛門統綱は五郎右衛門と改名し黒田氏の客分となる元和元年九月五郎左衛門細

同國伊加田莊武將監對馬左近肥後國岩野村薩摩內四同國木葉村豐岐內太地頭職
を賞賜せられ文和三年八月戰死す其子大膳亮經景嗣き貞治二年二月九州探題
斯波氏經副將愛智義成に屬す官軍の勢強盛にして敵し難く應安三年十二月二
十六日逃れて京師に上る四年十月探題今川貞世副將大内義弘に従ひ歸國し所
々に轉戰永和元年十月筑後國山崎に戰死す其子掃部助親景小法繼き豐前守護
職大内義弘に屬し嘉慶中飯田城衆に加へられ官軍菊池武朝と戰ふ應永六年親
景始めて壘を佐田莊青山に築き菅迫より遷て居る因て佐田氏と稱し薩摩守に
任す入道して昌節と號す永享七年三月三日家を嫡子因幡守盛景に譲る盛景子
因幡守忠景文安元年三月八日守護職大内教弘の證判に因り御許山領佐田莊五
拾參町武役勤之相殘分社領田河郡柿原名參町築城郡牛丸名八町深見莊下岩迫
屋敷土貢貳以上貳拾七町五段拾五代の地頭職を襲く其族佐田繁方或重文明元
年三月大友政親に従ひ城井左衛門佐秀房長野壹岐守行種と絲口原に戰ひ秀房
を射て之を殺す十二年忠景子彈正忠俊景相續して大内氏の爲に宇佐郡代とな
る其子大膳亮因幡守泰景嗣て郡代たり其弟を重次と云ふ泰景二子あり長子又
次郎重泰故わり祀を承けす次男越後守泰綱内川野村に分居す重泰の子大膳亮

莊地頭職に補す

可令早前薩摩守法師法名尊覺領知豐前國佐田莊地頭職足立五郎左衛門尉遠氏知行之分事

右爲同國安曇村替所被宛行也早守先例可令領掌之狀依仰下知如件

正應三年十月四日

陸奥守平朝臣

相模守平朝臣

延慶二年六月十一日其子大和守賴房嗣く賴房四男因幡權守公景出て築城郡城井谷菅迫に居り佐田莊地頭職を襲く建武三年三月二十八日足利尊氏に従ひ上洛の途に上る

新田左衛門佐義貞與黨誅伐事所被下院宣也仍今月二十八日可上洛也發向之時可抽軍忠之狀如件

建武三年三月二十六日

尊氏花押

宇都宮因幡權守殿

公景京畿所々に戰功を立て貞和四年七月十日肥前國田中宮鶴九跡田地貳拾町及筑後國門寺内菅大輔房跡田地拾町の地頭職を加賜せらる觀應二年正月三十日又豐前國吉田莊大夫妻家跡地頭職三年十二月二十日又豐前國元永村元永彌次郎入道跡内

深見彌次郎殿（法鏡寺北正樹藏）

津布佐彌五郎入道殿

彌五郎足利尊氏に屬す數傳して天文中に至り次郎丸と云ふ者あり津布佐を津房に改む弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ天正中入道して法山と稱す十七年三月黒田長政に降り觀源禪寺を創立して自ら住持す其子某農に歸し岩尾氏に復す觀源禪寺は延寶中淨土眞宗となれり次郎丸の族某筑前秋月長門守種長の臣となり天正十五年七月種長に從ふて日向國兒湯郡財部後高鍋に遷り世々秋月氏に仕へ其子孫今兒湯郡上江村大字上江に津房嘸之十津房貞芳同郡木城村大字木城に津房留吉同郡高鍋町に津房捨五郎住す其祖先の墓上江村比木にありしか近年小丸川の氾濫に因り流失す宇佐宮武官に津房氏あり是れ宇佐村の人其名跡を襲きたるなり

佐田氏

藤原姓

栗田關白道兼四世孫宗綱下野權守に任し宇都宮に居る因て氏とす宗綱四世孫宇都宮大和守信房文治元年九月五日豊前國壹萬五千町内九千七百貳拾餘町を賜り九州の武將を勅許せられ仲津郡城井郷に居る建久六年五月十六日豊前守謹職に補す其曾孫薩摩守通房正應三年十月四日佐田

若狹守藤原政廣

主税助二子あり兄を惣右衛門弟を新十郎と云ふ並に大友氏の軍役に従ふ然れとも主税助紹忍と善からす天正十四年九月七日大友義統の滅する所となる其後裔孫右衛門寛永中高並八村及船板平山等十村の庄屋となり老て剃髪して教知と稱す正立寺を創して自ら住持し職を其子新左衛門に譲り子孫連綿たり

因に高並谷に三家あり一を高並二を江口三を糸永と云ふ江口氏は大職冠鎌足二十二世孫攝州西成郡江口村住江口播磨守重豐十一世孫重熙應安三年高並谷に來り叢萊を開拓して居住せしより多く年月を経たり糸永氏亦久しく此に居る而かも兩家共に著れす或は高並氏の被官たりし歟前記田原紹忍家中に糸永と稱する者四名あり是れ或は高並谷糸永氏の後裔歟

津房氏 藤原姓 岩尾氏津布佐莊尾立村に居る因て津布佐氏と稱す元

應中彌五郎と云者あり

宇佐宮供僧神堯申豐前國大家野仲兩鄉内自見名田畑屋敷荒野鹽濱并今永田地事全訴狀如此傍人野仲次郎太郎不應裁許之間任下知狀可沙汰之由被仰候間可令申左右仍執達如件

元應元年八月十九日

前遠江守 花押

炊助源興秀とあるにて知る可し重堅寛永十五年五月廿六日死して子なし大神
姓今永重種入て嗣き爾來大神姓を稱す中莊天滿宮石燈籠に寶永三年八月吉日
當所住飯田市郎右衛門尉大神重良とある是なり其後孫重清連調を善くす

高並氏

藤原姓

高並谷に居る因て氏とす正和中高並小次郎入道明願

と云ふ者あり其子彦八正平中城を永原に築きて居る太宰府管領少貳筑後守頼
尙の狀に云く

今月十二日香志田城夜討同十二日延枝後攻及臺合戰之時被致忠勤之由承候
可令注進也仍執達如件

正平八年七月廿三日

筑後守 花押

高並彦八殿

天文中若狹守政廣と云ふ者あり大内氏に屬す其子市次郎主税助に任す弘治二
年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ふ翌年政廣死す其墓城址に在
り

弘治三丁巳二月廿八日

永原院忠山清義大居士

橋津掃部助殿

飯田但馬守殿

佐田彈正忠殿

(上書) 弘治四年十二月一日至郡衆長増奉書案文

長増は大友氏の臣吉岡越前守なり

鎮敦の墓城西十町許の山中にあり義忠の墓は城山の後に在り左の如し

天正六戌年十月十一日逝去

空 心安宗徹信士神儀

俗名飯田左京進鎮敦

天正十五年

矢崎氏

城主飯田但馬守源義忠墓

寅七月十日

村中

鎮敦遺子飯田新左衛門重堅莊村字中莊に歸農し宇佐宮武官となる其菩提所永照寺位牌に飯田左京大夫清原鎮敦とあり是れ後世の作にて飯田氏の源姓なる事は前記の如し現に碑文に源義忠とあるのみならず大内氏實錄三卷に飯田大

晴賢の亡ふるや長秀山口より飯田城に還る弘治二年四月長秀龍王城に抵り義鎮に降り其軍役に従ひ左京進に任し義鎮の偏諱を賜ふて名を鎮敦と改む

條々 (到津男爵藏)

一今度到津公澄不請 御下知喜多坊圓撰令追放坊跡之儀申與中納言剩於社邊乃傷殺害之狼藉雖被聞御國家御靜謐御調之砌社中亂怠不可然之段強而依致取合公澄領地三分一之事爲右罪科被点置可被付社御造營事

付圓撰歸坊之事

一中納言不惶 公儀公澄申合乍暫時住喜多坊殊更忘師恩背忠孝之條其科不輕所詮彼仁之儀爲社家中永々不可有許容事

一自今以後社家傍輩之間誇權威一雅意之企於有之者不肖之仁等可覃悉恐歟然上者不謂貴賤親疎被糺理非之輕重每事憲法之外不可有之事右之趣至社家中能々可被申達之由所被仰出也

弘治四年十二月一日

長 增 花押

安心院中務大輔殿

時枝兵部少輔殿

吉岡申儀候於此方難申決候當時之趣可有御察候然者幸御在城事候間乍御造作兩方申分御尋候て被加御意候者可畏入候遠方之事候間別而御入魂可爲祝著候恐々謹言

卯月廿二日

興 秀 花押

杉治部太夫殿御陣所(同上)

因に治部太夫此時山口より妙見岳城に派遣せられたる事一書に見えたり

治部大夫は隆泰なり弘治元年十一月十四日陶晴賢と共に嚴島に戰死す至渡川表出張の衆近日云々不申承候心外候仍正重被官糸永右近將監……拙者忤者共無他事存知之仁候對正重茂別而忠儀之仁之由承候條於于今者自然者泪中訴人も多哉雖然不可有別儀候之條被添御心被召仕候者於身も可畏入候委細此使可申候恐々謹言

如月四日

上包ニ
飯大長秀トアリ

長 秀 花押

杉民との申入候

(同上)

杉民は大内家老臣杉民部大輔興重ならん

興秀長子は大炊助主計頭長秀次子の小五郎但馬守義忠と云義忠飯田城に居る

と改む

豐前宇佐郡御領分内家友給地分德弘名積善寺用策事當時進退諸下作職近年不知行分爲愁訴參上候條御案内可申上之由是々申通家友一通令披露被成御對面候尤珍重候彼下作職等杉伯州御内友枝方御裁判多分落着之由候尤然之通被仰出候如此寺家家興立之儀近比神妙事候彼寺家事御領中と云家友給地分と云別而被入魂彌寺家相續干要候被仰出候此狀對家友代廣崎掃部允被申付候者可爲專要之由能々可申旨候恐々謹言

卯月七日

(上包)

家 勝 花押

秀 道 花押

奈古民部丞

飯田民部丞

家 勝

吉岡民部左衛門尉殿(同上)

就矢部三郎方與被官吉岡民部左衛門尉候忤先廣崎掃部允申組下作職之儀雖

きて飯田城と稱す南は佐田川西北は安心院川に臨み東は高山を負ひ本丸凡三反歩二の丸三の丸各貳反歩餘安心院谷を俯瞰し遙かに龍王山城と對峙す重房十二世孫昌秀文安長祿の際豊前守護職大内教弘に服事し其子安藝守貞家其子大炊助弘秀其子彌五郎大炊助興秀並に大内氏に仕へ自ら往きて周防山口に居り其臣石川彌右衛門を飯田城代となす

（不
明）

〇〇〇〇知行得弘村

〇錢從去大永五
至同子秋

未進三貫二百八十四文事以佐田大膳丞

所進目錄令披露候無沙汰之由候以外被仰出候仍宇佐御遷宮可爲來月十日候限今月中可被遂皆濟候猶以於無沙汰者一途可被仰付之由堅固可申旨候恐

々謹言

閏九月十三日

武 助 花押

與 重 花押

飯田大炊助殿代（中原廣崎衛盛藏）

興秀大内義隆の小座敷衆となり石見守に任し天文十九年七月十七日從五位下に叙す而かも陶尾張守晴賢に與し二十一年二月其使となりて豊後に至り大友義鎮弟晴英を請ふて防州に還り三月三日大内家二十七代の主となし名を義長

衛三郎と云ふ者あり初め官軍に屬し貞和中足利氏に降る九州探題一色頼行入道道猷の狀に云く

參御方之間本領半分事京都注進從左右之趣所預置也仍執達如件

貞和二年九月廿六日

沙 彌 花押

原口兵衛三郎殿（高並波藏藏）

天文中次郎と云ふ者あり大門村に壘を築く弘治二年四月龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍役に從ひ天正十七年三月黒田長政に降り其地を致す今も原口村に地頭屋敷と云ふかあり貳反歩許の地なり其後裔原口勅負と云ふ者天保十三年九月田之口村小川神社に太刀一口を奉納す子孫宇佐宮武官となり連綿たり因に永正中宇佐三郎公直と云ふ者辛島郷中原村原口屋敷に居り原口氏と稱す其子與三左衛門妙見岳城主田原紹忍の臣となる是れ別姓なり

飯田氏

源 姓

源義基孫土岐左衛門藏人從五位下信濃守頼房始めて信

濃國飯田に居る因て氏とす元暦元年宇治川の役に戰死す其子大和守重房建久三年豊前國に配せられ安心院永池村に居る因て永池村を改めて飯田村と名け字音にてはん田村と訓みおのか苗字も亦字音にて訓むこととせり遂に城を築

時枝兵部少輔殿

飯田但馬守殿

佐田彈正忠守殿

新四郎後に駿河守に任す口碑に云く副城主某新四郎と約し共に溫見谷城主岩男氏を攻む某曰く我は溫見に遠し君先發せよ我之に繼かん新四郎其言を信し城を空して出つ某其虛に乗して城を奪ふと其子孫存りて宇佐宮武官たり

因に齋藤別當實盛壽永二年四月平維盛に従ひて源義仲を北陸に撃つ時に鬚髯皆白かりしかば則ち之を染め壯者に伍して戦ひ遂に手塚光盛に首級を授く年七十三是れ歴史の稱する所なり然れども實盛此役に死せず宇佐郡に來て烏帽子山中に潛居す今も其地を實盛といひ且實盛の墳墓あり梵字等を刻す左の如し

西 實盛

東 新右衛門尉 藤原助次

北 七月○吉日

南は文字磨滅して讀難し

原口氏 清原姓 清原正高の裔院內原口村に居る因て氏とす建武中兵

感悅候必取靜一段可賀之候趣猶吉岡彌三郎可申候恐々謹言

十月一日

義 鎮 花押

安	心	院	中	務	大	輔	殿
內	尾	治	部	丞	殿		
惠	良	小	次	郎	殿		
中	山	左	馬	助	殿		
中	山	彈	正	忠	殿		
赤	尾	左	衛	門	大	夫	殿
矢	部	宮	內	丞	殿		
副	越	中	守	殿			
彌	富	右	衛	門	尉	殿	
深	見	中	務	丞	殿		
惠	良	美	濃	守	殿		
齋	藤	新	四	郎	殿		
橋	津	掃	部	助	殿		

と曰ふ院内長壽寺に恒松名内小河内屋敷上下二所を寄進す惠良氏古文書永正中三三郎左衛門尉益實と云ふ者あり大内氏に屬し駿河守に任す

宇佐郡長壽寺江某先祖寄進地小河内上下兩屋敷分事可有御愁訴之由蒙仰候得其意候於我等聊不可有等閑之儀候恐々謹言

永正八年五月三日

益 實 花押

惠良三郎殿御報

齋藤三三郎左衛門尉益實

(表書)

惠良三郎殿御宿所

(惠良彦四郎藏)

天文元年宇佐郡衆と共に妙見嶽城を守り十一月十四日大友勢を撃て之を退く其子を新四郎と云ふ弘治二年四月龍王城に至り大友義鎮に降り九月廿六日門司の役に從ふ

義鎮感狀橘津正益藏綱三郎は吉岡鑑興の子鑑興なり

去廿六門司城取崩候刻當郡衆之事別而粉骨軍勞之由具令承知候忠貞之次弟

一昨三日田原近江入道被申談宇佐郡被相催野仲兵庫頭領内上津野村迄相働
被得勝利候由須注進候辛勞察存候殊安心院中務入道香志田出雲入道粉骨深
重之趣諸勢無恙候由肝要候紹忍以熟談銘々承以狀可申候條閣筆恐々謹言

十一月五日

義 統 花押

深見壹岐入道殿

臼杵美濃守殿

十五年二月三好秀次に隨ひ薩州に入る十七年三月黒田長政に降り其地を致す
其子專太夫鎮興細川氏の時水車村莊屋となり子孫連綿たり

齋藤氏

藤原姓

貞治二年齋藤別當實盛裔三郎左衛門尉宗實と云ふ者

九州探題斯波左京太夫氏經に従ひて京師より來り遂に大友刑部大輔氏時に屬
す

以齋藤三郎左衛門尉申子細候無相違候者可悅入候穴賢々々

八月四日

氏 經 花押

宇都宮大膳亮殿（佐田完太藏）

其子伊豫守實長深見郷の内を領し城を築きて居る其氏を地名に負せて齋藤村

てを河内守所領とせり永正中壹岐守惟利と云ふ者あり子なし大永元年十一月
 豊後玖珠郡松本備中守則政の長子信濃守宗則を養ふて嗣となし壹岐守則孝と
 改稱す三年河内守盛時亡ふるに及んで則孝深見谷を專領す其子壹岐守基興天
 文元年大内左京大夫義隆の爲に齋藤駿河守等と妙見岳城を守り十一月十四日
 大友勢を邀へ撃て之を退く

去十四日至當城敵取懸終日防戰侍數多討捕頭○到來一見候從城内各切懸粉
 骨誠に無比類者也

天文元年十一月二十一日

義 隆 花押

深見壹岐守殿

齋藤駿河守殿

妙見岳城衆中

其子中務丞基資壹岐守に任す弘治二年四月龍王城に抵り義鎮に降り其軍役に
 従ふ後薙髮して壹岐入道と號す天正七年十一月三日紹忍の催促に應し安心院
 香志田臼杵等と共に下毛郡津民莊長岩岩城主野仲重兼を撃つ

松本和泉守殿（同上）

永祿二年和泉守陣明銳、河野直公、栗林重友相謀り、豊後大分郡駄原町淨土寺雲譽上人を請して石重山西福寺を疊石村に創建す。其弟主水天正六年日州高城に戰死す。正直の子を三右衛門尉宗則と云。後正春と改む。十五年二月三好大納言秀次に従ひ薩州に入る。十七年三月黒田甲斐守長政に降り其地を致す。正直慶長五年九月關ヶ原の役起るに當り大友義統西軍に黨し十三日中津川城主黒田勘解由次官孝高（東軍）と豊後速見郡石垣原に戰ひ敗れて降參し紹忍と共に豊後竹田城主中川修理大夫秀成（東軍）に屬し臼杵城主太田飛彈守重正（西軍）を攻めて克たす。十月四日佐賀關左義長鼻に至り紹忍等と自殺す。正春細川氏の時大莊屋となる。其子與治右衛門正重寛永中小笠原長次に屬し島原の役に従ふ。子孫宇佐宮武官となり連續たり。

深見氏 大神姓 大神基利と云ふ者始めて深見郷水車村に住す。因て深

見を氏とす。其曾孫を基愛と云ふ。基愛弟基直深見河内守兼守（和姓）の養子となり。建保中深見谷の地を分領す。然れとも基愛の家は河内守家の附庸たり。けん文安三年八月二日の深見領分四方指に河内守盛行獨り其名を署し立石山分水嶺を

馬守兼則に至り大友氏の幕下となる兼則の子を備中守則政と云則政二子あり長を信濃守宗則と云大永元年十一月宇佐郡深見氏を繼ぐ次を和泉守宗氏と云ふ家を承く天文元年三月廿三日大友修理大夫義鑑の意を承け兵を率ひて玖珠郡を發し二十四日宇佐郡深見郷壘石村に至り大内氏麾下絲永隼人を襲ふて其居城を抜き遂に居る

豐前國宇佐郡内壘石四拾町分知行所可宛行之狀如件

天文元年三月廿九日

義鑑花押

松木和泉守殿（深見龜策藏）

其子を五郎右衛門則氏と云ふ主膳と稱し後和泉守正直と稱す弘治二年四月義鎮に降る是年八月三日紹忍の意を承けて森村居住香淨寺伊賀守を撃て之を滅す

今度森香淨寺伊賀守落去之刻貴殿軍功殊息三右衛門尉若年に而由々敷勸誠忠貞之次第感悅無極候猶年寄共可申候恐々謹言

八月三日

紹忍花押

天正十年の事とし龍王城の落去を明末正月廿日と記す末年は天正十一年に相當す今此説に従ふ延享中に至り里人千代松丸等九人の戦死を悲しみ石を用て地藏尊像九個を刻り其地に建て且其側に左の石塔を立つ

延享四卯歲

青面金剛塔

六月吉祥日

善	辰	文	四	惣	與	九
			郎	次	兵	右
	右	次	右			衛
	衛	郎	衛			門
平	門					

松木氏

清原姓

一品舍人親王四代の裔中納言清原朝臣通雄の嫡子從

二位少納言正高寛平三年三月罪を獲て豊後員外介に左降し其領地として玖珠郡速見郡の内油布院日出生莊豊前國宇佐郡安心院の内及び筑後生葉竹野郡の内を賜ふ玖珠郡長野莊塚脇村に居る郡領山田郷住人矢野檢校藤原久兼其女を以て正高に嫁す帆足勝壽丸正道を生む後正高赦されて京に歸り正道郡領となる正道五男あり其三男三郎通次飯田郷司となる通次の六男を矢野兵衛藏人兼末と云兼末三十四世孫を松木河内守則秀となす其子壹岐守則道を經て其孫但

に在り夫人の墓は上市村田甫の中に存す里俗姫ヶ墓と曰ふ其碑文左の如し

天正十二甲申十月十二日

安心院殿前傑山良英大居士神儀

(裏)

寛文六巳酉年七月日

上 市 中

天正十二甲申年

戒光院心空貞香大姉

十月十三日

上市村高木又市所持の位牌に云く

安心院殿傑山良英大居士

麟生衆を率て龍王城に籠る翌年正月二十日城遂に陥る麟生萱籠村中尾に至り
敵兵の追ふ所となり自殺す其墓現に存す自然石にて文字を刻せず只安心院殿
の墓と云ふ千代松丸の遺子世に存りけん字佐宮武官となり安心院村及び日田
郡に今も安心院氏を稱する者あり

因に碑文に依れば安心院氏の滅亡は天正十二年の事なるか如し然るに里村玄碩翁の筆記には

公正後入道して麟生と稱す天正七年十一月三日田原紹忍の催促に應し香志田、
深見、臼杵等と下毛郡津民莊長岩城主野仲兵庫頭重兼を撃つ其子を千代松丸公
糾と云ふ

敬白妻垣山御神前

奉寄進安心院新開庄枝名用丸田地壹段之事

右件於田地者爲下作職代々知行無相違之然而家云武運長久依祈念之令寄進
畢隨而下地之事者祝令存知毎年二月大祭一會無懈怠執行同典役課役之事任
本名准據不有緩者也仍寄進狀如件

天正八年庚辰十二月二十日

安心院千代松丸

(妻垣神社藏)

(用丸は今安心院村大字古市字宮田と云ふ)

十年麟生大友氏に叛く十月十二日妙見嶽城探題田原與兵衛尉親盛紹忍養子實

兵を發して來り攻む千代松丸出て櫛野越に據て禦く新開玄蕃允統廣起て其背

後を襲ふ是に於て千代松丸敗れて其臣八人と共に戰死す因て後世此地を九人

ヶ峠と稱す夫人某氏亦翌日自殺す千代松丸の墓は上市村菩提寺安心禪院の内

馬助知家賊軍大内左京大夫義弘に屬す公弘の子を佐渡守公基と云ふ其子中務大輔公重後筑後守の時に當り永享七年三月新開縫殿允廣秀菊池武忠に與し來て龍王城即神樂嶽城を攻む公重防戦す文明明應の際筑後守公定と云ふ者あり天文中五郎中務大輔公正宇佐大宮司を以て地頭職を兼ね此時に當り大内義隆大友氏に備ふるか爲めに城井三郎兵衛尉をして龍王城を守らしむ弘治二年四月公正龍王城に抵り大友義鎮に降り其軍後に從ふ

就牢人誅伐之儀以條し申旨候此節別而馳走肝要候今度依忠貞之淺深一段可賀申之趣猶年寄共可申候恐し謹言

三月三日

義 鎮 花押

安心院中務大輔殿

飯田但馬守殿

橋津掃部助殿

時枝兵部少輔殿

佐田彈正忠殿

其外宇佐郡衆中(橋津正益藏)

入幡宮に詣て一國守護の城神意に隨ひ草創すへしと祈りけるに安心院（利根郡生田郷）の山上と覺しき所に經津主神現れ賜ひて神樂を奏て賜ふと見て夢は覺めぬ即ち其山上龍王に城を築きて神樂嶽城と稱し安心院氏と改め妻垣莊、上莊新原、木之裳、下市、折敷田、上市、古市、大佛、龍王、大口田、松本、板場、東椎屋、萱籠十六村の地頭職を兼ね之を安心院莊と稱す其子を五郎美濃守公康と云ふ

宇佐宮擬大宮司清輔代幸命申武藤五郎右衛門入道淨然背神領興行下知焼拂當宮領筑前國立岩別府在家由事遂檢見可注申之旨被仰合屋日向入道覺佛八坂左衛門五郎入道道海之處道海者既注進畢受佛請文者淨然爲古敵云々者菰論所守下知狀沙汰付下地於社家可被注申放火次第仍執達如件

正和三年三月十一日

前上總介 花押北條實時

安心院五郎殿（到津男爵藏）

公康子又五郎筑後守公宣宇佐大宮司を以て地頭職に兼補す上市村に居る今も其地を御屋敷（オヤシキ）と云ふ凡そ四反歩許の地なり建武中城井冬綱豊前守護職となり其子大和守親綱をして神樂嶽城を守らしむ應安中公宣子を公弘といふ其族左

久出て降る二十三日宗麟曰杵城に卒す七月三日公歸りて小倉に至り豊後を義統に豊前宇佐下毛上毛築城仲津京都六郡を孝高に賜ふ十六年正月十一日孝高中津川城を築く其役を地頭に課す城井野仲池永賀來犬丸日隈及び本郡中島伊豫守等峻拒す十七年二月孝高其子長政に兵三千騎を附して之を撃たしむ三月朔日長政來て中島城を攻め三日城陷る黒田氏破竹の勢を以て郡中の城地を沒收し其弟黒田兵庫頭を高森城に居き郡中を監す是に至て地頭全く亡ふ

地頭三十六家
小給人三十六家
世稱三十六士

城井氏

藤原姓

栗田關白道兼八世孫宇都宮大和守信房建久六年豊前

守護職に輔せられ仲津郡城井郷に居る其七世孫城井冬綱足利尊氏に屬し豊前守護職を授けらる因て其子大和守親綱をして神樂嶽城を守らしめ龍王城と改稱す應安四年親綱菊池武忠と瀬社川に戰ふ天文中城井三郎兵衛尉純房大内氏の爲めに復た之を守る弘治二年四月二十八日統房大友左衛門督義鎮に降り城地を致して去る後來南宇佐村に城井氏を稱し宇佐宮武官に列する者あり是れ其名跡を襲けるものならむ

安心院氏

宇佐姓

正安中菟狹津彦命四十三世孫宇佐大宮司公泰

に致す十三年十月二日時枝鎮繼中島統次の爲めに不意を討たれて防州に奔り小早川隆景に依る十四年日州土持氏叛きて島津氏に屬し薩人豊後を侵さんとす三月宗麟大坂に至り急を豊公に訴ふ豊公仙石秀久、長曾我部元親其子信親、十河政泰を將として六千騎を率ひて豊後に抵り黒田孝高、小早川隆景を將として本州に抵り大友氏を援けしむ九月六日義統自ら將として龍王城に來り兵を派して佐野、荒木、高並三家及び宇佐神官辛島並時を撃て之を滅す餘は皆降る乃ち將さに西豊前に向はんとする際豊後の舊臣柴田紹安、戸次鎮連等島津に内應の事聞へ蒼皇兵を旋す義久其弟義弘、家久に各兵貳萬を附し日向、肥後兩道より豊後に入らしむ十二月十二日家久進んで戸次川に陣す我軍之と戦ひ敗れて信親、政泰及び戸次統常等死す十四日秀久、元親本郡妙見嶽に退き尋て四國に歸り義統府内城を棄て高埤山城に移り十五日更に本郡龍王城に逃る相從ふ者吉弘統幸、宗像鎮次、田北統員、同統辰、臼杵統光、齋藤勘介、賀來主膳、秋岡式部、寒田統正等千五百餘人十五年正月二十九日豊公の將三好秀次壹萬餘騎を率て本郡に來り時枝城に陣す黒田孝高其軍監たり本郡地頭其先驅となり薩州に向ふ三月八日家久府内城を去り薩摩に歸る二十五日公自ら貳拾萬騎に將として小倉に至る五月四日公薩州大平寺に入る七日義

津氏と耳川に戦ひ大に敗れて宿將勇卒悉く死す七年正月十一日宗麟家を世子義統に譲り自ら臼杵城に老す是より秋月筑紫龍造寺等大友氏の命を用ひず薩人頻りに其兵を北し肥筑の諸城降陷相續き本州香春城主長野助盛、岩石城主高橋長幸、城井城主宇都宮鎮房、蓑島城主杉重吉、宇留津城主賀來惟康、長岩城主野仲重兼、廣津城主廣津鎮次及び佐野親重、時枝鎮繼等義鎮の行跡を疎み紹忍の奸曲を憎み或は龍造寺、秋月に與し或は毛利氏に内通して豊府の出仕を止む島津の將平田美濃守の誘引に依り野仲重兼は近郡の郷士を語らひ二千餘騎を率ひて七年正月九日大友の屬城を攻落さんとして坂手隈、末弘、田島崎の諸城を陥れ遂に賀來惟直か居城大畑に押寄せ惟直の爲めに打破られて太郎重貞を質として和を請ふ惟直之を許す此役本郡衆にして重兼の勢に加はりたるは萩原勘解由左工門、月股普請兵衛、中山左近、内尾帶刀なり是年冬重兼復た叛く田原紹忍深見一岐入道、臼杵美濃守、安心院中務入道、香志田出雲入道等をして之を撃たしむ是より時枝佐野と中島渡邊等の間に鬭爭熄ます七年正月國東郡鞍掛城主田原親貫叛く義統自ら將として之を撃つ二月二十四日親貫逃れて本郡に來り善光寺に潜匿す吉弘嘉兵衛、大津留河内守追捕せんとす兵二百を率ひて宇佐町に至る親貫侍童西村某其首を斬り寄手の陣

蘆 荊 掃部助

蘆 荊 玄 允

清 成 大隅守

綾目三右衛門

山下小次郎

糸 永 勘 内

市丸彌右衛門

渡部兵庫助

上 野 左 介

眞 玉 三之允

波多伊勢入道

田 原 右近大夫

田 原 勘解由允

田 原 左近大夫

田 原 玄 介

侍數合 九十九人

是より三十六士及び其他の郷士親賢の組下となり其指令に隨ひ翌年筑前秋月、肥前五ヶ山の役永祿四年七月香春、松山、馬ヶ嶽、門司の役に從ふ門司の戰方に酣にして八月十八日朝命降る乃ち大友毛利相和し元就は山陽山陰八國の管領に義鎮は九州探題に補す五年義鎮薙髮して休菴宗麟と號す宗麟屢自ら將として肥筑の野に出て秋月文種、筑紫廣門、高橋鑑種及び龍造寺隆信を降す是に至て宗麟慢心を生し酒色に荒淫し邪宗を信し神社佛閣を破毀す天正元年五月五日佐野親重、赤尾統秀を襲ふて之を滅す五年島津義久日州を侵し伊東祐清來り投す六年宗麟紹忍の説を容れ祐清の爲めに島津氏を撃たんとす諸將諫れとも聽かず八月十二日豊筑肥日七州の兵參萬五千騎を率て日州に向ふ本郡地頭概ね從軍す十一月十二日島

松成左馬助	綾部匠分允	竹田津市進	市丸織部助	郷司九郎	稻田藤次	倉成刑部入道	市丸左馬助	是藤大學助	田北權内	林民部少輔	綾目宮内丞	原口與三左衛門	稻光主馬允	清成八郎
松成彌兵衛尉	市丸宮内少輔	市丸監物丞	清末彈正忠	渡邊主水亮	都留喜太郎	有永勘解由允	深町主水亮	波多大學	木野市郎	波多善介	竹田津藤内	内田新介	綾部内藏丞	江上治部丞
綾部攝津介	市丸奎助	市丸藤左衛門	清末掃部助	蘆荊善次郎	岩室清三	陣新介入道	野田新介	波多南右衛門	久保大和入道	久保大藏丞	清成玄内丞	長木監物丞	清成兵部入道	竹田津内膳

十二年十一月朔日幸隆病て卒す寛永九年松平重直此に封せられ遂に廢城となる郡領
 南部の要親賢旗下妙見城定番籠勢人數(天正十五年十月二日現在)左の如し

有	永河内入道 資辰	岡部下總入道 清房	市九長門入道 清成
種田	因幡守	清成山城守 資房	稻光次郎右衛門
清成式部少輔	糸永惣左衛門	糸永河内守 幸輔	
種田大膳亮	糸永藤五郎	清成軍兵衛尉	
都留右近允	右田權右衛門尉	岡部彌次郎	
有永宮内少輔	有永又七郎	蘆荊越前入道	
牧小四郎	市丸六郎	竹田津大炊助	
竹田津作之進	黒田兵庫助 資利	竹田津刑部少輔 榮元	
綾目右馬允	綾目玄蕃允	竹田津左近允	
林治部少輔	郷司右京入道	成吉十郎	
竹上六郎	清成惣三郎	市丸式部少輔	
市丸左京亮	黒田彈正忠	黒田和泉守	
林勘助	市丸七郎	松成美濃守	

市丸大藏少輔 平田立賀 木部掃部助

蘆荊越前守 廣山大藏丞 彌富右衛門尉

城太郎左衛門尉 榮田伊賀守

因に小坂村川面氏日岳村河野氏小野川内村小野氏も地頭職たりしと云ふ説あり或は然らん他日を待ちて更に調査せん

此外宇佐神宮公文所下司職田所職及び土器長あり是れ固より地頭職にあらすとも其實武家の被官となり毫も他の地頭に異ならず其最も著はれたる者左の三家なりとす

江熊伊豆守 今仁山城守 高村縫殿助

是年八月義鎮全州を平らく九月毛利氏門司城を抜く二十六日義鎮本州の兵殊に宇佐郡の衆を驅て之を復す遂に田原近江守親賢後入道紹忍と號すを擧て豊前探題となし妙見嶽城及び龍王山城を與ふ親賢自ら妙見嶽城に居り本州城主小給人四百六十餘人の人質を徴し直侍百人をして交代登城して勤務せしめ龍王城に城代山内外記有忠を居く龍王城は正安中安心院氏の築く所と改稱す此に至て神樂嶽城と稱す有治中宇都宮氏此に據りて龍王の城と改稱す此に龍川忠興弟與三郎幸隆歸す天正十六年黒田孝高之を毀つ慶長五年關原の役起る龍王城五萬石を以てす其兄忠興に代て往て東照公に行營に謁す公悦て封するに

則總計五十二人なり此中同姓の者七人あり又中條長石吉武宇都宮北秋吉百留和間賀來は宇佐郡地頭の後にあらず他の縁故に依りて武官となりしならん此十四人を除けは三十六士となるなり糸永茂昌翁の説に此内にて昔の家筋は絶え果てしな縁なき人の繼ぎしには非すやと思はしむるも少からすと云へり實にさる事ならむ現に大園香下津房は他姓の人其名字を冒せしなり委しきは各家の條下にて辨すへし

其餘の地頭は既に滅亡し縱令然らざるも其力微弱にして自立すること能はさるなり其人名左の如し

深見河内守	香淨寺伊賀守	德野尾十郎左衛門
筈之口日向守	衛藤彌三郎	中山左近助
新開玄蕃允	月股普請兵衛	横山武藏守
平井清十郎	金光内藏丞	吉松勘解由
岩男中務丞	岡和泉守	津久見丹波守
臼杵與太夫	安倍日向守	土岐修理進
葛原兵庫助	山本莊左衛門尉	長洲刑部左衛門尉

豈に其下風に立つを甘せんや故に地頭職を罷められし後に追んで昔の波殘をしぬひ自ら請ふて神宮磐固の名の下にて宇佐神官の末斑に加はりしとの見其實を得たりと謂ふ可し明治三年庚午六月宇佐神宮より神祇官に書上げたる宇佐神官交名書中武官の名左の如し

赤尾直種	香下甚藏	菱形新平
中條廣重	都留鹿郎	長石左二郎
岩男十郎忠次	矢部慶助	弘山三郎直道
弘山重躬直次	飯田太郎	拜田武記光義
吉村八島義正	吉村安衛義正	佐田千稻鎮綱
中島瑞城直録	中島沖見宗直	上田數枝貫城
吉武直道	内尾栲美重隆	岩男正鹿貞次
内尾重久	市丸藻月氏兼	大園九郎
今仁嚴石誠喜	今仁誠盛	永松千尺盛近
麻生須立公秀	元重茂長	本多正辰
百留則孝	和間長江正忠	宇都宮宇源太
城井喜平	木内千葉貞胤	廣崎淺海茂世
蘆荊磯部實俊	是恒蟬	津房喜藤太
相良積枝貞行	北長風高長	松本百枝則之
原口眞草重久	賀來正志廣重	松本馬根勝利
櫛野牧馬	秋吉稻人正繼	齋藤六郎實次

都留高	橋津	矢部	菱形	佐田
飯田	安心院	齋藤	松木	妙現
原口	副	津房	中間	賀來
大門				畑房

大園
田拜

是亦一説なり暫らく記して參考とす

因に宇佐宮武官と稱する者あり其數凡そ三十六人とす然れども是を以て直に弘治天正中の地頭三十六士と同視すへからず抑々宇佐宮武官の起りに就ては數説あり曰く宇佐神領豐筑對三州三拾六萬石の時壹萬石に一人の割にて武官三十六人と定めたりと然れども宇佐宮大鏡にも三十六萬石領有の事を載せず且其頃は未だ武官を存せざるか如し曰く高並村江口氏所藏の家記に大内盛見守護職の時本州を三十六萬石と見て宇佐宮守護武官三十六人を置くとおれとも當時何萬石の稱なきのみならず豐前國は其後とても貳拾四五萬石に過ぎすと曰く細川忠興豐前八郡及豐後國東速見二郡合十郡三十六萬石に封せられ元和二年丙辰十一月八日其臣長岡興長を奉行として八幡宮行幸會を再興せしめし時武官三十六人を供奉せしめ其人は専ら地頭三十六家より撰出せりと此説眞に近し糸永茂昌翁の説も略此説に同じ曰く三十六士は何れも地方の豪族なりしか元和僱武の後は一擄飛揚の道なく徒らに農工に伍するを憂ひ神宮警固といふ名義の下にて宇佐神官の末班に加はりしものならむ享保十五年身滌會再興神列の繪圖を見るに武官は素袍を著け蕎麥角烏帽子(侍帽)を冠り股立を取り草履を穿ち竹杖を突きて三股神輿の間に供奉し警固の役に當れりと余思ふに足利氏の時武門の勢熾んにして往々社家を凌けり

田文書に石弓加來市助鑑壹箇所加來市助僕從與太郎と注す是れ賀來市祐と同人なるや否確ならず

蓋し聞く山藏村賀來氏の祖は豐後賀來城主賀來右衛門大夫鑑保次男景吉なり景吉其兄惟綱と共に享祿三年大友家中種族争に因り豐後を去り伊豫河野通興及び築城郡八田城主賀來孫兵衛入道全慶に依り天正二年全慶亡ひたるを以て始めて宇佐郡に來り姻戚佐田鎮綱に依る翌年惟綱死す十五年鎮綱亡ひ景吉山藏村に移住す其子惟貞に至て大莊屋となれりとそ然らば賀來市祐は山藏村賀來氏の祖にあらざる事知るへし或は云く建武中豐後賀來城主に維持と云ふかり其子源智宇佐神宮社僧となり其子孫に賀來市右衛門惟貞賀來市兵衛惟村賀來市右衛門惟孚等あり市祐壽廣は其子孫なるへしと或は然らん果して然らば宇佐郡三十六士の一人にはあらざるなり又應永八年安心院公弘其子二郎を南毛村に分封し加來二郎と稱す其子孫弘治天正の際加來次郎と稱する者あるやも知る可らずと雖も其事定かならず

前記三十六人を稱して宇佐郡公方衆三十六人或は小給人三十六士と云元重村河谷氏藏天正年中改宇佐下毛兩郡小給人名主書中宇佐郡の部に曰く

麻生	木内	元重	赤尾	佐野
今仁	萩原 數田	廣山 莊	津々 美高	中島 高
時枝	渡部	吉村	植田	岡崎 山
沖巢	○ ○ 明不	住江	是恒 畑田	相良 部川

神本 田 出 羽 守

田 大

蘭(妙見トモ云)

山賀 來 市 祐

房佐 田 大 膳

善矢 矢

部

飯 田 大 炊 助

安 心 院

院 齋

藤

口

内院 副

房 岩

尾

間

見松

木

香

下

津

西州軍記及び渡邊完所藏天文中字佐郡小給人三十六人名書大同小異なり賀來市祐存在せる事は左の書簡

先日は參上候御祝著之由候仍糸永右京亮方作分之儀委細至主計允申渡候於様鉢者重々可申談候由候具彼方可被申候恐々謹言

正月十七日

廣崎兵庫入道殿

(廣崎衛益藏)

壽 廣 花 押
扣 仲 他用

(上包)

廣崎兵庫入道殿

永松若狹入道
賀來 市 祐

壽 廣

に徴して知る可し抑々廣崎兵庫助か入道と稱するは天正九年以後なれば此書は其以後の物と視さるへからず而かるに永祿二年八月廿二日佐田彈正忠隆居より大友義鎮に出せる軍忠狀佐

人著到書には三十六士の一人に賀來次郎を載せて惠良小次郎を載せず因て思ふに元暦中緒方三郎惟榮源義經待設けの爲めに豐後志賀後岡城を築き其繋きの城として宇佐郡寶森城(後高森城)下毛郡大畑城(後加來城)大丸城及び築城郡鹽田城を築き其族賀來次郎惟興を大畑城に賀來三郎惟貞を大丸城に賀來小太郎綱中を寶森城に賀來某を鹽田城に居く而して大畑大丸鹽田の賀來氏は其子孫連續として天正中まで存續すと雖も寶森の賀來氏は斷絶して弘治永祿の際寶森城は都留氏又は佐々木氏の據る所となれり佐田村賀來氏の家記に賀來次郎惟國は豐後賀來城主賀來惟康十六世孫日向守惟正の長子にして宇佐郡末廣村を領す弘治二年丙辰夏大友宗麟豐前を徇ふ惟國降るとある由なれとも宇佐郡に末廣村なし或は惟國は下毛郡永添村末弘城主たりし歟然らば宇佐郡地頭にあらす德光顯藏本宇佐郡記に矢崎村飯田嘉惣治所持の書類には賀來次郎なし惠良小次郎ありと箋注す今此説に従ふ

明治四十三年五月六日余飯田嘉惣治相續人彦六を訪ひ其書類を見んと請たれとも見當らず但し宇佐郡小給人天文中記録と題する書あり茲に掲げて本文の參照となす

生麻	田敷	家高	時	重元	細川	洲長
内	萩	中	枝	元	相	長
尾		島	平	重	良	
清		玄	太	安	隱	
左		佐	夫	藝	岐	
衛	原			守	守	洲
門						
	生麻	家高	市四	原中	沖	高都
	木	津	渡	廣	集	留
	の	々	邊	崎	左	壹
内	山	見	式	對	馬	岐
		丞	部	馬	助	守
田原	佐	吉	仁	田上	田細	佐字
赤		村(今井トモ云)	今	清	是	菱
尾			仁	永		
備			伊	式		
後			豆	部		
守			守	左		
	野			衛		
				門		
					恒	形

越を経て本郡龍王城に莅む城主毛利元就の麾下宇都宮長秀代將城井三郎兵衛尉
統房出て降る其餘の地頭皆風を望んて來り屬す其人名左の如し

城井三郎兵衛	安心院五郎	松木主膳
深見壹岐守	齋藤駿河守	原口次郎
飯田主計頭	高並主稅助	津房次郎丸
佐田彈正忠	副但馬守	香志田出雲守
矢部伊勢守	大藺監物	廣崎對馬守
渡邊和泉守	上田因幡守	是恒備前守
吉村彌六左衛門	都留右近	橋津次郎左衛門
眞加江 ^{シシカヘ} 六郎	相良主水	麻生攝津守
木内帶刀左衛門	元重安藝守	赤尾式部少輔
佐野源右衛門	萩原四郎兵衛	時枝平太夫
櫛野彈正忠	荒木三河守	津々見源五郎
照山雅樂助	中島伊豫守	惠良小次郎

因に兩豐記宇佐郡記及び香下經三藏弘治二年秋大友宗麟公豐前國龍王城御在陣宇佐郡三十六

す守兵五百人八千七百石の城と稱す(宇都宮記)郡中第一の要害なり天文の末大内氏城井右馬允房統に託す

則ち本郡の地頭大内氏の命に従ふと雖も大友氏の勢力を本州に扶植すること久し特に應仁以後海内の大亂に乗して百方經略し其の命に従ふ者少なからず文明元年城井秀房長野行種國侍を誘ひ大友氏に叛く大友親繁其子政親に兵五千を附し龍王城に陣して之を撃たしむ秀房行種邀へて糸口原に戦ひ大に敗れ秀房此に死す永正元年大友親治來て所々を抄掠す大永四年大友義鑑義興の將陶隆房を走らせ兩筑及び肥前を降す天文三年三月二十六日義隆の兵豊後玖珠郡を侵す四月六日義隆更に隆房及び杉重連をして兵三千餘を率て本郡佐田越を経て豊後に入らしむ義鑑其將吉弘氏直寒田親將に命して之を禦く速見郡山香郷大牟禮山今勢場の役是なり此役本郡の地頭概ね大内氏に屬す二十年八月大友義鎮肥後を定む九月朔日陶隆房其君義隆を弑し義鎮弟三郎晴英を請て大内家を嗣かしめ名を義長と改め己れは晴賢と改稱して義長を輔佐す是に於て義鎮獨り鎮西に雄視す弘治元年十月一日毛利元就晴賢を誅し義長自殺す元就漸く鎮西に志を生し本州の士を招く因て二年四月二十八日義鎮自ら將として壹萬貳千騎を率ひ速見郡鹿鳴

杉七郎伯耆守重信

永享三年
持盛命す

杉伯耆守重綱

七郎重信弟にして其養子となる嘉吉元年教弘
命す文正二年丁亥正月死す鴨莊圓應寺に葬る

杉七郎伯耆守重友

重綱子

杉伯耆守重實

從五位下實杉重友子
七郎右京亮重家三男

杉伯耆守重矩

從五位下初名七郎介重政次隆景彈正忠天文中任伯耆守改重矩實重家二男杉彦八郎重
祐長子永正八年七月義隆命す天文二十一年十月二日陶賊の迫る所となりて自盡す

杉伯耆守重輔

七郎彦右衛門尉と稱す初名重信重矩子天文二十年六月義隆命す弘治二年丙辰三月
二日内藤彈正忠隆世の攻むる所となり同月四日山口寶壽院にて自殺す年三十六

宇佐郡妙見嶽城大内家代將

同上

杉民部重保

杉伯耆守重祐

彦八郎豐前守護代
杉伯耆守重友子杉七郎右京亮重家次男

仁保加賀守盛安

寶徳文
明の頃

杉兵庫助興重

後三河守父民部大輔天文六年正月八
日從五位下時年六十一永正天文中

杉勘解由左衛門尉興道

貫備後守道敦

天文十四年

右田下野守興實

天文十六年

因に此城は天慶中純友の築く所にして極樂寺城と曰ふ建久以來宇都宮氏據守し妙見嶽城と稱

本郡に侵入して瀬社川に至り義高の義子を襲ふ義高之れに死す既にして武忠盛見の撃つ所となり二十三日肥後に還る六月二十八日盛見少貳と筑前深江に戦ひ敗死す其弟持盛嗣て立つ五年四月八日持盛弟持世と本州篠崎に戦ふて敗死す持世嗣て立つ嘉吉元年六月二十四日赤松滿祐足利義教を弑す持世其難に死す因て其弟教弘本州守護職を襲く寛正六年八月二十六日教弘伊豫興居島陣中に卒す其子政弘嗣て立つ明應三年九月政弘職を其子義興に譲る享祿元年十二月二十日義興薨す其子義隆本州守護職に補し天文二十年に至る抑々大内氏の本州に於ける應安七年義弘始めて守護職となりしより此に至て八世百七十七年守護代を京都郡松山城に置き全州を總攬する外別に妙見嶽城に代將を置き本郡を鎮す其名の知れたる者左の如し

京都郡松山城將大内家豊前守護代大内氏實錄其他古文書

杉彈正大弼興信

應安七年六月より

杉彈正大弼弘信

應永元年より六年十二月迄

天野安藝守義顯

同十五年迄

杉中務大輔弘重

應永十六年三月より京都郡を領す

補す時年十九歳なり永和二年南朝二年武政筑後半國を討從へ遂に豊後を侵す親世
撃て之を退く四年九月二十九日貞世義弘軍を合せて武朝と肥後訖磨原に戦ひ利
あらず明德三年南朝元年十月五日南北朝合一す應永三年探題貞世罷む義弘之に補
す四年武朝少貳冬資名和顯長等と故懷良親王子征西將軍宮良宗王を奉して八代
城に據る千葉大村等の諸族之に應す義弘弟滿弘盛見に兵五千を附し大友親世と
軍を合せ八月二十二日八代城を攻めて之を抜く是に於て九州平定す五年親世京
師に在り義弘と共に柳營を守護す親世疾に罹り國に歸ること能はす其兄左近大
夫氏鑑自立して大友家の主となり菊池を亡ぼして九州を平均せんと欲し檄を四
方に馳す本郡の士此に同意せしは宇佐大宮司公晴、菱形長量、土岐賴忠、同賴基、妙見
昌親、安心院知家、長洲吉綱、中村房信、住江時元、時枝惟光等なり六年正月大内盛見の
爲めに撃破せられ氏鑑敗定し終に府内如來院にて自害す十二月二十二日義弘泉
州堺に戦死す九年盛見本州守護職に補す永享三年正月十一日菊池太郎武忠舊怨
を思ひ出し來て戸代山、福知山、牛王山を攻落し當國一圓を討從へんとそ謀りける
馬ヶ嶽城主新田義高之を憂ひ下毛、宇佐の諸士を糾合せんか爲めに出向す武忠之
を知り菊池武世をして兵二百餘騎を以て馬ヶ嶽を襲はしめ自ら三百騎を率ひて

氏第二子征西將軍宮を置く二年武重田河郡戸代山城を築き其子武宗及び麻生玄
 隨ひ九州に來る蕃頭をして之を守らしむ因て本郡の地頭之に屬する者多し是年武重病て死し其
 子武士遁世す弟武光家を繼く賴尙亦歸順して鎮西の官軍大に振ふ延文四年賴尙
 復た叛く貞治二年南朝正平十八年正月足利義詮斯波氏經を九州探題に補す氏經本州に
 下向し大友氏時其他近國の兵を催し九月二十七日菊池武光名和顯長と仲津郡長
 者原に戰ふて敗北す氏經氏時退て豊後高崎山城に據る十月武光來り圍む氏經之
 と和す武光兵を引て去り氏經京師に還る三年義詮澁川義行を九州探題に補し官
 軍に當らしむ武光家を嫡子武政に讓る應安三年南朝建徳元年足利義滿畠山義深を本州
 守護職に補す三月十日義深柳ヶ浦に下著し戸代山城を拔きて居る四年義滿今川
 貞世を九州探題に補し大内弘世に援軍を命す弘世嫡男義弘に兵四千を附して之
 に従はしむ十月貞世義弘本州に來り神田に陣す郡主小給人先を爭ふて來り屬し
 本郡にては土岐賴實安心院知家深見政直中島宗頼妙見重基佐田重次上田道實佐
 野親道深見房直等馳せ加はり武政子武朝と戰ふ而かも利あらず七年三月京師の
 援兵來り大友親世亦力を合せて武政と大に太宰府に戰ふ是に至て官軍勢盛り和
 を請ふ貞世之と平らく乃ち新田義氏大内氏に屬す九月義滿義弘を本州守護職に

宇佐郡地頭傳記

尾立維孝著

總 敘

豊前國宇佐郡の地頭職は其補任北條氏の時に昉まり足利氏の中葉に至ては其數六十有五の多きに及び十一郷二百三十一村に割據し各々家の子郎從を有し弓箭を取て戰鬪に従事す建武三年二月八日足利尊氏楠正成・新田義貞と攝津に戰ひ大に敗れ九州に奔り筑前國宗像郡江口に至る大友氏時兩豐の兵を催して來り屬す時に官軍の將菊池武重京師に在り其弟武敏及び嫡子武士肥後の兵を發して筑前に出で賊將少貳貞經其子賴尙等と戰ひ貞經以下百六十五人の首級を得然れども終に敗れて菊池城に還る尊氏一色賴行仁木義長をして菊池城を拔かしめ四月二十六日東上す宇佐郡の地頭多く相從ふ武重變を聞て肥後に歸り義を唱ふ興國元年北朝曆應二年武重吉野行宮に詣り征西將軍宮一品式部卿懷良親王を奉して本州柳ヶ浦に下著じ賴尙の屬城京都郡馬ヶ嶽城を攻落して新田義基其子義氏義基は新田太郎基

今仁氏	一二七
高村氏	一三〇
地頭三家	一三二
前記二十九家の後に調査し獲たる者	一三二
川面氏	一三二
河野氏	一三二
小野氏	一三三

土岐氏		一一八
葛原氏		一一九
山本氏		一一九
長洲氏		一二〇
市丸氏		一二〇
平田氏		一二〇
木部氏		一二〇
廣山氏		一二〇
蘆効氏		一二二
城氏		一二三
榮田氏		一二四
彌富氏		一二四
准地頭三家	宇佐宮彌勒寺下司職又は田 所職又は土器長たりし者	一二七
江熊氏		一二七

筌之口氏……………一〇三

德野尾氏……………一〇四

衛藤氏……………一〇四

中山氏……………一〇七

新開氏……………一〇八

月股氏……………一一〇

橫山氏……………一一一

平井氏……………一二二

金光氏……………一二二

吉松氏……………一二三

岩男氏……………一二四

岡氏……………一二五

津久見氏……………一二五

臼杵氏……………一二五

安倍氏……………一二七

元重氏	七二
赤尾氏	七四
佐野氏	七九
萩原氏	八二
時枝氏	八四
櫛野氏	八七
荒木氏	八八
津々見氏	九〇
照山氏	九〇
中島氏	九一
惠良氏	九五
地頭二十九家	九九
弘治二年四月大友義鎮宇佐郡に臨める時既に滅 亡し又は小弱にして自立すること能はざる者	九九
和姓 深見氏	九九
香淨寺氏	一〇三

副 氏	四五
香志田氏	四六
矢部氏	四八
大藺氏	四九
廣崎氏	五〇
渡邊氏	五二
上田氏	五五
是恒氏	五七
吉村氏	五七
都留氏	六〇
橋津氏	六〇
眞加江氏	六三
相良氏	六四
麻生氏	六六
木内氏	七二

宇佐郡地頭傳記目次

總 敘

一頁

地頭三十六家小給人三十六家世に三十六士と稱す

二〇

城井氏

二〇

安心院氏

二〇

松木氏

二五

深見氏大神姓

二七

齋藤氏

二九

原口氏

三二

飯田氏

三三

高並氏

三九

津房氏

四〇

佐田氏

四一

未松金吾氏回答書

弘山末太郎氏回答書

德光速氏回答書

周防國山口常榮寺回答書

深見平藏翁香淨寺氏滅亡談

廣山神社社司廣津氏回答書

恒松莊內六十八村々名書

瑞雲山光嚴寺安置國清寺殿位牌

元重氏古文書

末松氏藏深見領四方指證文

地藏院由來記

龍王村近藤氏藏古文書

土岐秀苗氏回答書

橋津正益氏回答書

佐田友雄氏回答書

吉村貞右衛門氏回答書

野本氏古文書

岩尾林平藏觀源寺古文書

岩男忠左衛門書置

高竹山松壽寺地藏堂再建棟札

都留清一郎氏回報櫛野家記事

大村奎郎氏回答書

高森佐々木家調書

安部元弘氏回答書

阿聖山大雄寺位牌

中莊天滿宮奉納飯田重清等連誦

副殿物語拔書

上田美年氏回答書

中島武直氏回答書

賀來倉太氏回答書

廣崎嘉十郎氏回答書

渡邊完氏調查都留家記事

今仁伊之吉氏回答書

祥雲山金龍寺過去帳

蘆荊新太郎氏回答書

深見龜策氏回答書

宇佐郡誌

普門山成就院由來開書

惠良彦四郎氏古文書

宇佐神官交名書寫

是恒家調書寫

里村玄碩翁雜記

野本家譜

川谷新氏藏河谷系譜及古文書

小野氏系譜略書

糸永茂昌翁回答書

南毛加來氏家譜拔書

到津男爵藏古文書

萩原氏古文書

高牟禮氏古文書

矢部善次氏回答書

莊野氏古文書

尾立氏古文書

杉子爵系圖

佐田文書

川野良藏氏述小野家記事

川面氏系圖

源姓香下氏系圖

瑞光山永照寺位牌

宮成男爵藏古文書

今仁氏古文書

高村氏古文書

福本氏古文書

真邊孫市氏回答書

辛島氏古文書

北氏藏古文書

時枝氏藏古文書

林統氏回答書

赤尾氏古文書

高並氏古文書

江口氏古文書

岡天滿宮額

源姓飯田氏系圖

九州史談會雜誌

相良氏家記

相良氏系圖

同上

探古錄

蘆荻氏系圖

河谷氏系圖

副氏所持小山氏系圖寫

友岡榮太郎氏藏古文書

樋田中心氏藏文治記

上田氏系圖及古文書

日向國津房畛之十氏回答書

筌之口氏系圖

山口氏家記

岩男氏系圖

賀來熊太郎氏回答書

大友能直一代記

菊池氏系圖

群書類從書

荒木古老傳

豐後史蹟考

出光氏系圖

善光寺古文書

細川三齋より高森三卜へ與へたる書簡

乙咩神社古繪圖

石重山西福寺略記

熊谷磐舟氏回答書

安倍姓生山氏系譜

巖山西福寺明細帳

佐田氏古文書

天柱山長興寺位牌

安心院位牌

乙咩氏古文書

松木氏系圖

深見氏系圖

瀧貞氏古文書

中山氏古文書

廣津氏古文書

豐後三浦氏古文書

土岐氏系譜

廣崎氏古文書

中島氏古文書

封戸三郎系圖

天柱山長興寺鐘銘

橋津氏古文書

久満山寶珠寺位牌

吉村氏古文書

深見氏古文書

松木氏古文書

新開氏系圖

衛藤氏系圖

弘山氏系圖及古文書

豐後阿部氏古文書

同三浦氏系圖

香下氏古文書

川谷氏古文書

飯田彦六氏系圖

八幡宮本記

清水寺記

九州道之記

宇佐宮大鏡

宇佐諸神事考

妻垣神社略歷

宇佐宮雜徵

宇佐郡諸家古文書

宮成系圖

宇佐宮大宮司系譜之續出光氏

平姓紀姓木内氏系圖

大神姓系譜小山田氏

丹部姓系圖

阿南氏系圖

大神姓臼杵氏系圖

中津記

彦山紀行

細川幽齋

宇佐宮小鑑

應永宇佐宮坊領坪付

由布院六所宮記

廣山庄八幡宮由來記

宇佐郡鄉莊名字拔萃書

渡邊氏系圖及古文書

出光氏古文書

藤原姓佐野氏系圖

宇佐郡記付屬書

大神惟基系圖

佐伯氏系圖

藤原姓安倍系圖

豐前志

豐陽志

豐府聞書

豐筑亂記

豐後弘安記

豐州亂記

豐前古城記

豐鐘善鳴錄

九州治亂記

宇佐郡記

豐後全史

菊池傳記

中津興廢記

宇都宮記

宇都宮系圖

豐前國志

豐後國志

豐薩軍記

豐府記

豐前覺書

豐前紀行

豐前古城址一覽

豐前事跡考

大友興廢記

中津歷史

豐國史談

大内氏實錄

戶次軍談

城井谷物語

神社考

引用書目

古語拾遺

古事記傳

神名帳考證

大日本史

扶桑略記

源平盛衰記

姓氏錄

寛永系圖

本朝編年錄

和名類聚鈔

太閤記

西國太平記

兩豐記

令義解

延喜式

職原抄

日本外史

鎮西要略

平家物語

新撰姓氏錄考證

諸家大系圖

本朝改元考

太宰管内志

鎮西軍記

應永戰記

西州軍記

宇佐郡地頭傳記

凡例

一本書は宇佐郡に關係ある史乘戰記は勿論社寺の緣記各家の系譜感狀軍忠狀等を廣く引用し又實地に就き宅址城墟墳墓を探訪して編成す就中德光顯君の拾集したる宇佐郡諸家古文書十卷及び熊野御堂眞哉翁の探古錄五卷を最大資料となす各家の條下に古文書一二通若くは三四通を出す悉く掲げさは簡に従ふなり

一本書は諸書を綜合して編せしか故に自ら原書にひかれて文體一ならず之を一體に改めなは反て原文の意を害なはん事を恐るればなり

一此篇は稿を更むること凡そ七回百方事實を獲ることに勉めたり然れとも未だ完全と謂ふ可からず識者の是正を待ち他日補修する所あらんとす

明治四十三年十二月

著者識

卅頭戰國年時餘
陷角勢爭必先亮麻
不辱祖先能有幾
堂、六十八名家

八十一翁中洲三島毅題



正誤

一 頁八行

同 九行

三 頁十一行

四 頁十二行

九 頁十二行

十 頁一行

十 頁十三行

十一 頁十一行

十四 頁十一行

十五 頁二行

十八 頁十三行

同 十行

同 十五行

二十二 頁六行

二十七 頁六行

同 十一行

三十二 頁三行

四十 頁二行

同 同

同 八行

同 八行

同 八行

同 八行

同 八行

同 八行

正誤

三 月

二十八 日

敗走

九月

衛盛

與太郎の下に矢班壹箇所同人僕從中六の十

一字を脱す

河谷氏

過ぎすと

の字衍

徒

七年

工

後

四軍

續

彈正忠守殿

云ふの下に惣右衛門は刑部至に新十郎は右

馬允に任ずの十九字を脱す

從ふの下に永祿二年八月二十二日佐田彈正

忠隆居に屬して西郷遠江守の要害を攻め兩

人共に負傷すの三十九字を脱す

糸永氏の下には大神比義の裔にしての九字

を脱す

越中守

正誤

四十五 頁十 行

同 十一行

同 十四行

越中守嗣て大友氏の軍役に從ふ副氏父子の墓碑上副村

字ベテに在り其一二には梵字の間に前但州大守、弘治二年八月等の字存す他の一二には本源宗澄居士

天正九年己五月十六日等の字存す則ち其滅亡は此時に

在る歟里人は副殿大友家派遣の臣大津留左京進を謀て

之を殺し遂に滅亡を招くと語り傳へり越中守の弟某僧

となり同村空禪寺に住す空禪寺後に光善寺に改め其子

孫世々此に住し現に副氏を稱す同寺位牌に曰く桂林院

殿前但州大守鐵山樹翁大居士三百回忌法會執行。其裏

に讀誦淨土三部妙典全卷施主三副衆民千時文政九戌十

月從二日同至三日中今年當三百十二年とあり城址の碑

は蓋し此時に建たるものならん一説は副は但州の地名

にて現に副と云ふ名瀑あり但馬守は初めより副氏を稱

し此地に來りて其苗字を地名に負はせたるなりと云ふ

吉ハ衍

五十七 頁三 行

五十八 頁八 行

六十一 頁四 行

六十二 頁十一 行

六十八 頁七 行

七十八 頁三 行

同 十二行

百三十二 頁六 行

正誤

二十八 日の下に但馬守の三字を脱す

其墓碑あり

村中建之の次に左の數行を脱す

存する

實の下に知の字を脱す

稱すの下に其の字を脱す

存れりの下に其字を脱す

歩の地なりの十八字を脱す

小野川内村莊屋となり行

104
29
1

宇佐郡地頭傳記